

祖堂集卷第十 石頭下卷第七曹溪第七代法孫

玄沙和尚、雪峯に嗣ぎ、福州に在り。師は諱は師備、俗姓は謝、福州恥阜の人なり。咸通の初め芙蓉山に上り、鐘陵の開元寺道玄律師に於いて受戒し、山門に却歸せり。凡そ施為する所は必ず人に先んじ、風霜を憚らず、豈に寒暑に倦まんや。衣は唯だ布納のみにして道は精專に在り。語灸に規有りて時倫に參せず。雪峯は師の器質粹容を見て亦た多く相い接す。乃ち師を稱して備頭陀と為せり。斯くのごとくすること數載、陪して仰ぎ親しく依る。

一日有りて普請す。雪峯、一條の蛇を見、杖を以て撩起し、衆を召して云く、看よ看よ、刀を以て交りて兩段と為さん。師は便ち杖を以て挑げて背後に抛ち、更に顧視せず。衆僧は愕然たり。雪峯云く、俊なるかな。

ある日、開墾した田で普請した折り、雪峯が一匹の蛇を見つけて杖で巻き上げ、雲水たちに呼びかけて云うた。見てろよ、刀で切つてまう二つにしてやる。師はすぐさま杖でかかげて背後にはうり投げ、それきりふり返りもしなかつた。雲水たちは愕然とした。雪峯は云うた、スマートだな。

雪峯一日綻して曰く、備頭陀は未だ曾て諸方を経歴せず。何ぞ妨げん看ること一転することを。是くの如くすること四度を得たり。師は和尚の切なるを見て、和尚の処分に依つて装裹して一切しり、恰も去きて嶺上に到りて石頭に斟著し、忽然として大悟せり。後失声して云く、達摩は過し来らず、二祖は伝持せずと。又大樹に上りて江西を望見し了つて云く、奈是許養婆と。便ち雪峯に歸れり。雪峯は他の来るを見て師に問う、養をして江西に去かしめしに、那ぞ与摩に廻ること速きを得たる。師は對えて云く、到り了れり。峯曰く、那裏に到れりや。師は具さに前事を陳べたり。雪峯は深く其れを異として器重し、入室の談を垂れたり。師は即ち尽く玄機を領すること瓶瀉の水の如し。

雪峯はある日呼んで云うた、備頭陀はまだ諸方を巡り歩いていない。一まわり見て来たつていいだろう。こついつことが四度かさなつた。

師は和尚が懇ろなのを見て、和尚の言いつけどおりに、旅したくをとこのえて挨拶を終え、あたかも峠にさしかかった時、石にけつまついで忽然大悟した。そのあと思わず声をもらして、達磨は持つて来なかったし、二祖は伝持しなかった、と云った。また大樹に登って江西を望見して云った。……。すぐに雪峯に帰った。雪峯はやって来るのを見て師に問うた、おまえを江西に行かせたのに、よくもまあそんなに速くもどれたものだ。師は答えた、行って参りました。雪峯が云つ、どこへ行って来たのだ。師は具さに前の出来事を話した。雪峯は深くそれを異として器重し、入室の談を垂示した。師はたちどころに尽く玄機を理解すること瓶から水が注がれるようであった。

・ 奈是許裴婆 裴は江西全体つまり江州宗を指すであらうが、奈是許が読めない。

・ 如瓶瀉水 涅槃經四〇に出る故事。

初め普心に住し、次いで玄沙を下す。後恥王迎えて安国寺に居せしめ、礼重して師と為す。奏して紫衣と師号宗一大師とを錫う。三処に住持し、三十来年、八百衆を匡せり。

問う、如何なるか是れ学人の自己の事。師云く、自己を用いて什摩をか作す。

問う、どういづのが学人の自己といふことでしょうか。師が云う、自己なんてものを持ち出してどうしようといふのだ。(自己がなんの役に立つといふのだ)。

問う、従上宗門中の事、此問(原作問)には如何んが言論する。師云く、人の聴く(な)少し。

問う、むかしからの宗門中の事ですが、ここではどのように議論なされるのですか。師が云う、残念ながら聞きとれる者がいない。

師云く、仏言く、吾に正法眼有り、摩訶迦葉に付嘱す、と。我は道う、猶お話月の如く、曹溪の弘子を豎起せるは是れ指月の如し、と。

師が云つた、仏が言つには、私には正法眼が有り、摩訶迦葉に付嘱する、とわしに言わせれば、月の話をするようなものであり、曹溪大師が弘子を立てたのは月を指さしたに過ぎない。

問う、古人は瞬視して人を接せり。師は如何んが人を接する。師云く、我は瞬視して人を接せず。進んで曰く、師は如何んが人を接する。師は之を視る。

問う、古人はまたたきで学人の相手をしました。師はどういう風な相手の仕方をするのですか。師が云つ、わしはまたたきでは人の相手をしな。進んで云う、師はどのように学人の相手をするのですか。師は質問者を見つめた。

問う、古人は拈槌豎弘す、還た宗乗中の事に当れるや。師云く、当たらず。進んで曰く、古人は意作摩生。師は弘子を豎起す。進んで曰く、宗門中の事は作摩生。師云く、養自ら悟るを待ちて始めて得ん。

問う、古人は槌を取り上げたり弘子を立てたりしましたが、宗乗中の事に当たっているでしょうか。師が云う、当たっていない。進んで云う、古人の意図はどうなのでしょう。師は弘子を立てた。進んで云う、宗乗中の事はどうなのでしょう。師が云う、お前が自ら悟ってこそだ。

・師豎起弘子 古人はこういうつもりだったということの表明。

・待養自悟始得 お前に自悟してもらわなければなんともならんところだ。

師長生に問う。維摩は佛を觀ぜざらく、前際來らず、後際去らず、今も則ち無住と。長老作摩生か觀せん。對えて云く、某甲の過ちを放さば、今の商量有らん。師曰く、長老の過ちを放して作摩生。長老良久す。師云く、阿誰をしてか委せしめん。對えて云く、徒らに耳を側つるを勞するのみ。師云く、正に知る、養が鬼趣裏に活計を作すことを。

師が長生に問うた、維摩は次のように佛を觀じている。過去から來たのでもなく、未來に行くのでもなく、現在にとどまるのでもない、

と。長老はどのやうに観るか。対えて云う、わたしの過ちをゆるしてくれるならば相談にのりまじょう。師が曰う、お前さんの過ちを許したらどつたといつのだ。長老は長い間口をつぐんでいる。師が云う、長老の良久の消息を誰に解らせようといつのか。対えて云う、聞こつとしても無駄ですよ。師が云う、やっぱりお前さんは餓鬼道で暮らしているのだよ。

・ 維摩 維摩經見阿男佛品の句。

・ 放某甲過 答えに間違ひがあるかも知らんということをお承知くださいますならば。

師 魚鼓の聲を聞く。乃ち云く、我を打つなり、と。

師は魚鼓の音を聞いて云つた、わしを打っている。

・ 魚鼓 漁鼓ならば竹製の樂器、道情という道家のほつで歌う歌の伴奏に使つ打樂器で、長さ五尺ばかり、直径二寸の竹の筒の一端に魚の皮を張つて叩く。

師 南州に遊びし時、王太傳と二房に坐す。時に一沙弥有り、簾を掲げて入らんと欲す。師と太傳とを見て便ち簾を放つて身を抽いて退歩す。師云く、者の沙弥、二十棒を喫するに好し。太傳云く、与摩ならば則ち延棠が罪過なり。師云く、無<sup>いな</sup>佛法は是れ這個の道理ならず。也た須らく子細にすべくして好し。僧、中塔に問う、沙弥は過ち何に在つてか二十棒を打せらるる。塔云く、更に三十棒を添つるも沙弥又た過ち無し。又た興化に問う、興化云く、若し二公の坐する處を會せば、此の棒は外よりは来らず。又た順徳に問う、玄沙与摩に道う、意作摩生。順徳云く、水の為に水を打せず。僧曰く、与摩ならば則ち太尉も亦た合に先嘔し去るべきなり。徳云く、又た他に<sup>かれ</sup>求むるも肯んせざるを成す。進んで曰く、只如<sup>たとえ</sup>ば水の為に水を打せじとは意作摩生。徳云く、青山礪いて塵と為す、敢えて閑人無きを保せんや。

師は南州に行った時、王太傳と同じ部屋に坐つていた。その時一沙弥があつて、簾をにかけて部屋の中に入りかかったが、師と太傳とが居るのを見ると身を引いてしりぞいた。師が云う、あの沙弥は二十棒喰らわしてやりたい。太傳が云う、とするとこの延棠の罪です。師が云う、

ちがつ。佛法はそのような道理のものではない。もっと仔細に見て下さい。ある僧が中塔に問う、沙弥はどういう過ちをして二十棒打たれたのでしょうか。中塔が云う、その上に三十棒打たれても沙弥には過はない。又興化に問う、興化が云う、もし二公が坐っていた處が解つたならば、あの棒は外からは来ないのだ。又順徳に問う、玄沙があのように云つたのはどういふところからでしょうか。順徳が云う、水のために水を汲まない。僧が云う、だとすると大尉もセンタバのやり方でいかなければならなかつたんですね。順徳が云う……。言葉を進めて云う、では水のために水を汲まないといふのは、どういふことです。順徳が云う、青山を石臼でひいて塵にしようといふ閑人が居ないと、も限らんとぞ。

・延棠 王太傳の名である。

・好喫二十棒 好は、さあそつしなさいと人に進める場合と、自分がそつしたい場合とがある。

・延棠罪過 大傳が居なければそついう無礼なことはするはずはない。私が異物として存在したからです。

・仏法不是这个道理 あなたらしくもない。

・先施 先施婆。涅槃經十の話しにもとつき、怜利さを表す。

・又成求他不肯 大尉についての言葉のようである。いやそれどころではない、おいと呼んでも何も持ってきて来ないことになってしまつて  
いる、というよつな意味の語が。

・青山云々 青山を塵にしようといふ壮大な目的がある。

天請問經に曰く、云何なるか利刀劔、云何なるか澗毒藥、云何なるか熾盛火、云何なるか極重暗。洗の時佛は彼の天に告げて曰く、麤言は利刀劔、貪欲は澗毒藥、鮮恚は熾盛火、無明は極重暗なりと。人有つて拳して雪峯に問う、如来は只利刀劔を説くのみにして、未だ嘗つて劔に當らず。請う、師劔に當れ。峯云く、咄、好悪を識らざるの漢、人有つて此の語を持して師に拳似す。師云く、似たることは則ち似たり。是なることは則ち是ならず。僧便ち問う、請う和尚劔に當れ。師云く、咄、好悪を識らざるの漢、人有つて中塔に拳似す。中塔云く、不可思議なり、古

人と摩に見知す。此くの如くなりと雖も一問を進むることを欠く。僧便ち問う、請う、和尚道え。塔云く、尊宿分上還た這个有りや。

天請問經に云う、何が利刀劔ですか。何が凋毒藥ですか。何が熾盛火ですか。何が極重暗ですか。その時佛はその天に向かった云われた。麤言が利刀劔である。貪欲が凋毒藥である。瞋恚が熾盛火である。無明が極重暗である、とある人がこの經文を示して雪峯に問うた、如來はただ利刀劔を説くのみで、未だかつてその劔に当たったことはありません。どうか師よ劔に当たって下さい。雪峯が云う、咄、善し悪しも分からぬ奴め。ある人がこの語を師に示した。師が云う、らしいことばらしいが、そうかというところではない。そこで僧が問う、どうか和尚さん劔に当たって下さい。師が云う、咄、善し悪しも分からぬ奴め。ある人が中塔に示した。中塔が云う、古人がそのように理解したのは素晴らしい。しかしもう一問発すればよかった。そこで僧が問う、どうか和尚さんおっしゃって下さい。中塔が云う、あなたのもち前にそもそもこれがあるのか。

・天請問經 大正大藏經卷十五に収める。

・当劔 自分の腹に突き立てる。自分の腹を突きつける。

・咄云々 劔に当たって見せた。

・麤言の麤は捨象されて、単に言説のみが問題とされているようである。

志超上座 衆の為に茶を乞い去らんとする時、師に問う、伏して乞う、和尚提撕せよ。師云く、口だ是れ養不可なるのみ、更に我をして提撕せしむるや。進んで曰く、乞う、師直指せよ、志超は是れ愚癡の人ならず。師云く、是れ養是れ愚癡人なること作摩生か會す。進んで曰く、時は人を待たず、乞う、師指示せよ。師云く、我が這裏に三棒有り、養が愚癡を打たん。會するや。志超會せず。中塔云く、自ら愚癡なり。地感云く、和尚の愚癡は什摩人をしてか打たしめん。遂に傷して曰く、三棒の愚癡不思議、浩浩溶溶として自ら之を打つ。行じ来たって目前に明明に道う、七顛八倒是れ汝が機と。

志超上座が衆僧のためにお茶の托鉢に出ようとした時、師に問うた、どうぞ和尚さん指導して下さい。師が云う、ただお前だけはだめ

だ。そのお前がこのわしに指導せよというのか。進んで云う、どうか直指して下さい。この志超は愚癡人ではありません。師が云う、ほかでもないお前さんこそが愚癡人だということがどう解るといふのだ。進んで云う、時は人を待ちません、どうか指示して下さい。師が云う、ここに、お前さんの愚癡を打つ三棒がある、わかるか。志超上座にはわからなかった。中塔が云う、きわめつきの愚癡だ。地藏が云う、玄沙和尚の愚癡は誰れに打たしたもんだらう。そこで偈を作って云う、三棒に打たれる愚癡は不思議である、のたりのたりと自分で打つのだ。ぶったたいて目の前ではつきり云ってやるう、七顛八倒するのがお前さんの機だ。

・是養是愚癡人云々 頭こなしにやつつけているよつではない。志超を全否定しているのではなく、愚癡の質を転換してやるうといふ気分も感じる。(この句の中の愚癡は不是愚癡人のそれとは内容が変わっているか。或いはすでに只是汝不可といふところから高い内容の愚癡が問題とされているか。志超上座は愚直な修行者であったように感じられる。薬山は、如今出頭来盡是多事人、覓箇癡鈍不可得」と言い、南泉は、近日禪師太多、覓箇癡鈍不可得」と言つ。さらに『五祖下五百人、只廬行者一人不會佛法、不識文字、他家只會道』といふ。原文「是養是愚癡人作摩生會」は二通りの理解が可能。つまり、ほかでもないお前こそが愚癡人である。たとえ、直指してもどう解るといふのか、といふのが一。ほかでもないお前が愚癡人であるといふことが、どう解るといふのか、といふのが一。前の問いを引きとつて云っているのだから後の方が良い。

・地藏云 玄沙和尚の愚癡だけは何とも手がつけられんという賛嘆の言葉。汝機の汝は玄沙を指す。この話は他には見えない。主題は愚癡である。もしタイトルをつけるならば、愚癡を打つ。

師 靈雲に問つ。那裏は這裏と何似いかん。雲云く、也た只だ是れ桑梓なるのみ。別に他故なし。師曰く、何ぞ道わざる、也た知らんことを要すと。雲曰く、什摩の道つことを難する有らん。師云く、若し實ならば便ち請う、道え。靈雲偈ありて曰く、三十来年劍客を尋ぬ、葉落つること幾廻か再び枝を抽ず。一度桃花を見てより後、直に如今に至るまで更に疑わず。師云く、靈雲も也た什摩生か桑梓の能ある。雲曰く、向に道えり、故より外物にあらずと。師云く、不敢、不敢。又云く、靈雲諦當なることは甚だ諦當なるも、敢えて保原作報す、未徹在なることを。

雲曰く、正に是なり、和尚還た<sup>は</sup>徹せるや。師云く、若し与摩ならば即ち得たり。雲曰く、古に亘り今に亘る。師云く、甚だ好し。雲曰く、蜻蜻師、一頌を作り、靈雲に送りて曰く、三十年来只だ如常、葉落つること幾廻か毫光を放つ。此れより一たび去る雲霄の外、圓音の體性法王に應ず。

師が靈雲に問う、あちらはここにくらべてどうだ。靈雲が云う、あちらも故郷であるに過ぎません。別に他事ありません。師が云う、どうして云わないのだ、そこが知りたいと。靈雲が云う、云うのが難しいではありません。師が云う、もしほんとなら、どうぞどうぞ云ってくれ。靈雲が偈を述べて云う、三十年このかた剣客を尋ねたが、幾度も葉が落ち枝が生えるのを見た。ところが一度桃の花を見てからと、いつもの、ずっと今までなら疑つたことがない。師が云う、靈雲もまたどうして故郷の能であるのか。靈雲が云う、元来外物ではないとさつき云つたではありませんか。師が云う、恐れ入った。又云う、靈雲は諦當ははなはだ諦當だが、底までつきぬけていないことは保証する。靈雲が云う、正にその通りです。いったい和尚さんはつきぬけているのですか。師が云う、もしそうならよいのだ。靈雲が云う、昔も今も変わりません。師が云う、はなはだけっこう。靈雲が云う、はい、はい、師は一頌を作つて靈雲に送つた。その頌に云う、三十年このかたただいつもの通り、幾度も葉が落ちて毫光をはなつことになった。ここから一度天空の外に行けば、圓音の體性が法王に應える。

・何不道也要知 靈雲の答えに満足できなかった。そういうことでなくて、そこが知りたいのだ。

・靈雲偈 伝灯録卷十一 靈雲の伝に、初在匠山、因桃花悟道。有偈曰、三十年来尋劍客、幾回落葉又抽枝（以下原文に同じ）とあるが、原文の二句目が平仄が合わないので、伝灯録の方が良い。なお巻十九参照。

・什摩生 祖堂集に他に三例あるのみ。意味は作摩生と同じ。

・桑枝之能 根本のはたらきを云つのである。

・諦當 ぴたりとあたる。つばをおさえる。

・葉落幾廻 葉が落ちる度に光を増す。皮膚脱落しつくして真実の光が出てくる。

・応法王 法王の声とこちらのそれとが響き合っている。

師 招慶に問う、汝作摩生か驢使馬使を説かん。慶云く、某甲姓は孫なり。師云く、是なることは即ち是なり、且く作摩生か是れ驢馬。慶云く、也た只だ是れ桑梓なるのみ。師云く、知り得たるや。慶云く、要且つ是れ和尚ならず。師問う、作摩に大意を説かん。慶云く、与摩に顛倒することを得たり。師云く、知り得たり。便ち偈有つて曰く、用處の妙理は機を換えず、問い来り答え得ること不思議、應現常にして明らかに友を知る、人人自在に功を得ること希なり。又偈ありて曰く、再び道友を觀るに清源を話す、人人道を問う全からざるは無し。法法恒然として皆是の如し、四生九類體中に圓かなり。

師が招慶に問う、お前は驢使や馬使のことをどのように説明するか。招慶が云う、わたしは孫という苗字をもった人間です。師が云う、なるほどそれはいいとして、驢や馬はどういうものだと思いますか。招慶が云う、私の場合と同じように、それも桑梓にほかなりません。師が云う、わかつているのか。招慶が云う、ともかく和尚さんではありません。師が問う、どのように大意を説明するか。招慶が云う、よくもそのように顛倒されましたな。師が云う、いかにもわしは顛倒している。招慶が云う、私も顛倒しております。師が云う、わかった。そこで師は偈を作つて曰う、用處の妙理は機をとりかえない、問えば答えて不思議である。應現常にして明らかに道友を知る、問う者答える者各々自在にまれに見る功を得た。又偈を作つて曰う、再び道友に会つてお互いに故郷ともいふべき清源のことを話した、各人道の問ひ方が完全である。それぞれの法は常住でみなありのまま、四生九類もその法が体中に円かにそなわっている。

・ 招慶 長慶慧稜のこと。伝灯録卷十八によれば、姓孫氏。…至天祐三年、受泉州刺史王延彬請、住招慶」。

・ 驢使馬使 不詳。

・ 某甲姓孫 姓を云うのは名のりをあげることである。まぎれもない某甲であつてそれ以外のものではない。

・ 也只是桑梓 孫はわたしの桑梓、馬は馬の桑梓をもつ。

・ 要且不是和尚 つつばねた云い方。私は私で、和尚さんじゃない。わかるわからぬという問題は和尚とは関係ない。あるいはともかく、驢や馬は和尚さんとは違つ。

・大意 仏法の大意。

・得与摩顛倒 招慶のつっぱね方に対してギャップがある。大意と桑梓との顛倒、本来の家郷という問題に対して大意という問いかけが顛倒している。大意が先にあるのではなく、桑梓がピタリときまれば大意もきまる。

・得功希 文字通りにはめつたにそついつこととはないということ。そついつ功を得たのである。

問う、如何なるか是れ正妙なる心。答つ、尽十方世界都来是れ真人(原作之)体。

師 開平二年戊辰の歳、十一月二十七日、身体極めて熱す。曰く、我は是れ大悟底の人、盡大地一時に火發す。是れ衰小小の輩、走却すること難らず。休長老便ち問う、和尚尋常十方を罵る、什摩に因りてか与摩地に到れる。師云く、達する底の人すらな此の如し、豈に況んや是れ衰諸人をや。便ち化に順う。春秋七十四、僧夏四十四。恥王、塔を崇うす。長興元年庚寅の歳、將仕老林澄、碑文を製す。淨修禪師讚して曰く、玄沙の道は孤、禪門の楷模。一半の偈を言つ、四海五湖。巨鼈は海面に、金翅は雲衝に。岳崖の嶮峻、佛法の有と無と。

師は開平二年戊辰の歳、十一月二十七日、身体に極熱を發した。その時云つたわしは大悟底の人間だ。いま盡大地一時に火が發した。お前らのようなケチな奴等はとても逃げられんぞ。すると休長老が問つた、和尚は平生十方を罵つておられる。なのにどうしてこんなことになつたのですか。師が云つ、達人でさえこんなさままだ、いわんやお前らなど。途端に遷化した。七十四才、法臘四十四であつた。恥王が塔を建て、長興元年庚寅の歳に、將仕郎の林澄というものが碑文を作つた。それに淨修禪師が讚を附したが、曰く、玄沙の道は孤高であり、禪門の模範である。四海五湖に説き示す、一半の偈を持して。海に浮かぶ巨鼈のごとく、天駆ける金翅のごとく。玄沙の仏法における有と無との相剋は、岳崖のように嶮峻である。

・走却不難 意味を取りがたいので走却大難と改めて読む。

・將十一郎 將仕郎と改める。官名である。

・岳崖云々 有と無との懸崖に師の仏法は立っている。

長生和尚、雪峯に嗣ぐ、福州に在り。師諱は皎然、福州の人なり。雪峯の門に造りてより、密に伝心の旨に契つ。一日、雪峯、因に古人の語を讀んで、光境俱に亡ず、復た是れ何物(原文になし)に到つて、便ち師に問ふ。這裏に合た什摩の字をか著けん。師對えて云く、某甲の過を放さば、今の道処有らん。峯云く、蕘の過を放す。作摩生か道わん。對えて云く、某甲も亦た、和尚の過を放す。

・古人 盤山宝積卷十五。

又た因に玄沙云く、一切森羅鏡中の像。便ち杖を提起して師に問ふ、這个は是れ像。阿那个(原文になし)か是れ鏡。師對えて云く、若し是くの如くならずんば、争でか圓通なることを獲ん。

・若不如是 これが像、どれが鏡かということではなれば。また、杖が像でなければ。

師、雪峯に在りし時、後生の為に偈を造つて曰く、素面もて相呈するも猶お識らず、更に脂粉を添えて競闘きそい看る。這裏に若し玄と実とを論ぜば、吾と万重の山を隔つるが如し。

・添脂 不識の連中が素面に脂粉をそえて。

・競闘看 ムキになつて見よつとする。競闘は競頭に同じ。

問う、従上の宗乘、如何んが言論せん。師云く、闍梨の為に長生の路を荒却す可からず。

・不可為闍梨 長生山の道は、従上以來つながらつてゐるのだ。それを、お前にあらされてたまるか。

問う、古人道う、無明即佛性、煩惱は除くを須いず、と如何なるか是れ無明即佛性。師嗔る勢を作し、拳を竖起して喝して云く、今日、今の師僧を打たん。如何なるか是れ煩惱除くを須いず。師手を以て頭を撃して曰く、今日、今の師僧を打たん。任摩に人業を發すことを得たる。

・作嗔勢 唐代では怒ることを發無明という。發無明して即仏性のところを見せた。

・得任摩發人業 よくもそのような人業の發し方をやったな。

師堂を巡りて後ち、厨下に到る。雪峯曰く、我れ尋常師僧に向かつて曰う、是れ什摩ぞ、と。未だ人の對するもの有らず。阿菴、作摩生。師對えて曰く、某甲の過を放さば、亦た商量あらん。峯云く、菴の過を放す。作摩生か商量せん。對えて曰く、某甲も亦た和尚の過を放す。雪峯曰く、相識は天下に満つるも、知心は能く幾人ぞ。

・是什摩 卷七雪峯章参照。

・相識云々 顔の知り合いは多いが、心の知り合いは果たして何人か。

師、鵝湖に到る。當門に安下するに、忽然として燈頭の来りて燈を挑ぐるを見て、便ち偈を造つて曰く、一靈の孤燈當門に懸く、挑げ来らんと擬欲するも歴劫に昏し。山聲朴直にして人は見難し、此中に會得せば処処に全からん。

・山声朴直人難見 山声は本来の風光を示しているのであらう。朴直は声の調べの素朴さ。人は声を出している人。

内侍問う、古人言有り、一切衆生は日に用いて知らず、と作摩生か是れ衆生は日に用いて知らざる。師乃ち内侍を指揖して曰く、橄欖子を喫せよ。内侍又た問う、作摩生か是れ衆生は日に用いて知らざる。師云く、内侍は適来、豈に是れ橄欖子を喫せざりしや。對えて云く、是なり。師云く、古来、衆生は日に用いて知らず。如今、内侍亦た日に用いて知らず。

・指搦 祇壇。

・橄欖子 日常食べる果物。オリブ。

問う、如何なるか是れ主中の主。云く、昨日は一個を送り去り、今日は一個を迎え来る。

鵝湖和尚、雪峯に嗣ぐ。信州に在り。師 諱は智孚、福州の人なり。未だ実録を覩ざれば化縁の始終を訣せず。

僧問う、五逆の子、還た父約(原作的)を受くるや。云く、自裁すること有ると雖も、未だ己を傷くるを免れず。

僧が質問する、五逆の子もまた父に制約コントロールされるでしようか。答えて云う、(子が)自分を規制して悪い点を矯正したとしても、(五逆の子としての)自己の本分をそこなうことは免れないのだ。

・受父約 原文「受父的」では意味をなさないので、伝燈録に従って「父約」父に「コントロール」されることと読む。「父」はここでは「法の王」という意味。

問う、國に定乱の劔無きに、什摩と為てか四海晏(原作)宴(清)なる。云く、君王に道無し。君臣(原作)王(の)道合するの事如何ん。云く、令せず亦た行われず。

質問する、國に乱を治める剣がないのに、どうして天下は太平なのです。答えて云う、君王に道がないからだ。(質問)君臣の道がうまくかかっているとこのことはどういふことですか。答えて云う、命令を出しませず、その命令が行われもしないことだ。

問う、如何なるか是れ仏向上の人。云く、正に知る鬮梨の奈何ともすること勿きを。進んで曰く、什摩と為てか奈何ともすること勿き。云く、未だ必ずしも小兒は君王に見ゆるを得ず。

質問する、どういふ人が仏上人ですか。答えて云う、閻梨にとってはどういふこともないことがはつきりわかる。一歩すすめて質問する、どうしてどういふこともないのですか。答えて云う、子供が君王に会うことができるとは限らない。

問う、利婁相い撃つに側耳せざる者如何ん。云く、哲。

・利婁 不詳。

問う、虚空、経を講ずるに何を以て宗と為すや。云く、閻梨は是れ聴衆にあらず、去れ。

大普和尚、雪峯に嗣ぐ。師、諱は玄通、福州福唐縣の人なり。兜率山に出家し、依年具戒す。便ち参遊を慕う。雪峯に見ゆるに数年盤泊し、更に他往せず、承言領旨す。而して大普に居す。

僧有り問う、巨海の驪珠、如何が取得せん。師乃ち撫掌瞬視す。

ある僧が質問する、大海の驪珠はどのようにして手に入れられるのですか。師はそこで掌を打ってまばたきをした。

問う、塵を撥い佛を見るの時如何ん。師曰く、枷を脱却し来たらば商量せん。

質問する、塵を撥って佛を見る時はどういふしょうか。師は答えて云う、首かせをとりはずして来たら議論しよう。

・趙州録卷中問、撥塵見佛時如何。師云、撥塵即不無、見佛即不得」。

鏡清和尚、雪峯に嗣ぐ、越州に在り。師、諱は道緘、温州の人なり。

師 初めて恥に入り、靈雲に参見するや、便ち問う、行脚の大事、如何ぞ指南せられむ。雲云く、浙中の米、作摩の價なるか。師曰く、顔と米價と作して會せんとす。

師が初めて恥に行き、靈雲に参見したおりに質問した、行脚の大事をどのように御教え下さいますか。靈雲は答えて云うた、浙中の米はどんな価だ。師は云うた、すっかり米の価といふことで理解してしまつところだつた。

・顔作米價會 あなたは行脚の大事を米価といふこととして思いちがいでいるのではありませんか。

却つて続いて象骨に到る。象骨問う、汝は是れ什摩處いすこの人ぞ。對えて云く、終に温州に生長すと道わず。峯云く、与摩なれば則ち一宿覺は是れ汝の郷人なり。云く、只だ一宿覺の如きは是れ什摩處の人ぞ。峯云く、者个の子、一頓棒を喫し、且つ放過せらるるに好し。

そのあと続いて象骨山に到つた。象骨(雪峯)は質問する、おまえは何処の人だ。答えて云う、温州で生まれ育つたとは言いません。雪峯が云う、それでは一宿覺はおまえの同郷人であるな。答えて云う、一宿覺などというのは何処の人ですか。雪峯が云う、こんな奴は、二十棒をくらつて、放免されればよいのだ。

・一宿覺 温州の永嘉玄覺六祖の弟子)のこと。初め質問されて、終に温州で生長したとは言いませんと答えた時、既に玄覺のことが念頭にあつて、それに対する對抗意識を含んでいたことは明らかである。

師又た問う、従上の祖徳、例として入路を説く、還た是なりや。峯云く、是なり。学人は初心後学なり。乞う、師の个の入路を指示せられんことを。峯云く、但だ者裏より入れ。師云く、学人蒙昧なり、再び指示を乞う。峯云く、我れ今日多安ならず。放身し便ち倒る。

師は又質問する、昔から祖師古徳方はいいあわせたように、修行の糸口を説明したそうです。そうですか。雪峯が答えて言つ、そうです。自分はまだかけだしの新米ですからその糸口(入路)を御教え下さい。雪峯が答えて云う、ここから入れ。師が云う、私は蒙昧でありますから、もつ一度御教え下さい。雪峯が答えて云う、私は今日、身体の調子が悪いのだ。(雪峯は)ばたつとそのままたおれた。

・ 入路 一般的に糸口と言つ場合と、問題の展開の中であるポイントについてのヒントを言つ場合があるが、ここでは前者。

・ 但從者裏入 この言葉には何かの身振が伴っているように見える。

・ 不多安 あまり見ないが、身体の調子が悪いこと。

又問う、只だ従上の祖徳の如きは豈に是れ以心傳心せずや。峯云く、是なり、兼ねて文字語句を立てず。師曰く、只だ文字語句を立てざるが如きんば師、如何ぞ傳うる。峯良久す。遂に礼謝して起つ。峯云く、更に我に一転原作伝を問え、可あに好からずや。對えて云く、和尚に就きて問頭を一転原作伝せられむことを請つ。峯云く、只だ与摩なるのみなりや、別に更に商量有りや。對えて云く、和尚に在りては与摩に道うは則ち得たり。峯云く、汝に於いては作摩生。對えて曰く、人を辜負殺す。峯曰く、辜負せざる底の事、作摩生。師便ち珍重す。

又質問する、昔から祖師古徳方は以心傳心しないことがあるうか。雪峯が答えて云う、そうだが、もうひとつその上に文字語句を立てないのだ。師が云う、文字語句を立てないなどは、師はどのようにして傳えられますか。雪峯はしばらく黙然とした。そこで御辞儀して立ちあがった。雪峯が言つ、もう一轉語私に問いかけてみても悪いことはなからう。答えて云う、どうか和尚がかわりに問題を一転してください。雪峯がかわつて云う、ただそれだけなのですか、別にもつと商量があるのですか。答えて云う、和尚の場合はそついつぶつにおっしゃるのはそれでよいでしょう。雪峯が云う、おまえはどうなのだ。答えて云う、私は期待を裏切られました。雪峯が云う、おまえの期待を裏切らないことは何だ。師はそこで、おだいじにんと言つた。

・ 只与摩 先の峯良久すんを受ける。

・ 辜負殺人 よくも私をがっかりさせられました。

又た一日、雪峯、衆に告げて云く、堂堂美原作当ん（秘密底、師便ち出でて對えて云く、什摩の堂堂美原作当ん（秘密底なるぞ。雪峯、臥床より騰身し起ちて云く、什摩と道うぞ。師便ち身を抽きて退きて立つ。

又ある日、雪峯が衆に告げた、堂々密々底。師はそこで進み出て答えて云つ、何の堂々密々底ですか。雪峯が臥床からはね起きて云つ、何と言ったのだ。師はそこで引き退いて立つた。

・堂堂密密底 「堂堂」と「密密」は反対概念で、「堂々」は正面きつて顕現すること。「密々」は背後にかくれていること。幽玄。

又た一日普請す。雪峯、匠山の語、色を見て便ち心を見る、を榮原文になしす、還た過有りや。師対えて云く、古人什摩事をか為す。峯云く此の如しと雖も、我れ汝と商量せんと要す。対えて云く、与摩に商量するは、某甲の地を鑿するに如かず。

又たある日の普請の時、雪峯は、色を見れば心を見るところ匠山の語を取り上げて云つた、この語に何か手落ちがあるか。師がこたえて云つ、古人は何をしたというのですか。雪峯が云つ、それはそつだが、わしはお前と商量したいのだ。こたえて云つ、そのように商量するよりも、わたしの土おこしの方がましだ。

・匠山語 匠山の語は仰山の伝中五 五十七頁)に見える。匠山の語は、馬祖の、新羅万象一法之所印、凡所見色皆是見心」といふ語を受ける。

・古人為什摩事 古人の言ったことやつたことを何を今さら問題にするんですか、という語気。

・我々共汝商量 要はほつす。共は、……と。

又、一日行く次いで、雪峯便ち問う、盡乾押の事、一刹那を出でず。只だ一刹那を出でざる底の事の如きは、今時、什摩の處に向かつて弁明せば則ち得たるや。師、対えて云く、更に什摩人と商量し去らんとするや。雪峯云く、我も亦た対え有り。汝但だ我に問え。師便ち問う、今時、什摩の處に向かつて弁明せば則ち得たるや。峯乃ち展手して云く、但だ這裏に向かつて弁明す。師対えて云く、此れは是れ和尚、物の為にするること情切なり。峯便ち笑つ。

またある日歩いていた時のこと、雪峯が問うた。盡乾押の事は一刹那を出でない。ところで一刹那を出でない事は、今どこに見てとつた

らよかるつか。師がこたえて云つ、一體誰と商量なさるつと云つのですか。雪峯が云つ、わしにもこたえがあるのだ。お前さんただわしに問え。そこで師が問つ、今どこに見てとつたらよろしいでしようか。そこで雪峯は展手して云つ、這裏に見てとれ。師がこたえて云つ、和尚さん、衆生のためにする情や切なるものがありますね。すると雪峯は笑つた。

・更共什摩人商量去 この答えは、直前の問答の切り返しと似たような切り返しである。

・我亦有对云々 わしに弁明させて見よ、と云つ語気。

・為物情切 老婆親切すぎる。

峯又の時に云く、与摩に尊貴なることを得、与摩に綿密なることを得たり。師対えて云く、ム甲、山門に到りてより、今数夏を経たり、和尚、与摩に徒に示すを聞かず。峯云く、我向前無しと雖も、如今は已に有り。妨ぐる所有原文になしること莫きや。対えて云く、不敢。此れは是れ和尚已まざるのみ。峯云く、我が此くの如きを致(原作置)せり。又云く、才を量つて職に處らしむ。

雪峯はまたある時云つた、よくもまあそのように尊貴であり、綿密であり得たものだ。師がこたえて云つ、わたしはこの山に来てから今数夏を経ましたが、和尚さんがそのようにおっしゃるのを聞いたことがありません。雪峯が云つ、以前はなかったけれども、今はあるのだ。お前の邪魔になるのか。こたえて云つ、どういたしまして、和尚さん已むに已まねなかつただけです。雪峯が云つ、わしをこんなにさせおつた。又た云つ、才能に合わせて官職につかせる。

・得与摩云々 原文に争得与摩云々とあるが、得与摩という語気からして、上に争の字は附きにくい。伝灯録には此事得恁麼云々とある。争はあるいは事の誤りか。とりあえず争の字をはがいて読む。

・不聞和尚云々 原文に可聞和尚与摩示徒とあるが、上の文とつづきにくい。伝灯録により、可の字を不に改めて読む。

・我向前雖無 そついつ尊貴さや綿密とは。

・莫有所妨摩 原文、莫所妨摩では語をなさない。伝灯録により莫有所妨摩と改めて読む。

・不已而已 不の下に得の字が欲しい。しかしこのままで同じような意味になるのかも知れない。つまり、和尚さんがそう説いたのではなくて、それが和尚さんに云わせたのだ、と云うこと。

・致我如此 一寸まいった語気。

・量才処職 おかげでここに住さしてもらっている。

是に於いて言を承け旨を領す。遍く諸方を歴し、凡そ機縁に対して悉く皆な冥契す。旋りて東越に廻る。初め鏡清に住し、後に天龍、龍冊に居す。錢王、徳高きを欽仰し、紫衣と法號順徳大師を賜つ。

新到の参ずるを見る次いで、弘子を拈起す。対えて云く、久しく鏡清に嚮つ、到来するに猶お紋綵の在る有り。師云く、今日、人に遇いて却つて人に遇わず。後人有つて進んで問つ、今日、人に遇いて却つて人に遇わず、意作摩生。師云く、一盤の御飯、反りて庶食と為る。

新到が参じるのを見た時、師は弘子を取り上げた。それにこたえて云つ、久しく鏡清を慕つておりました。来てみると紋綵がふっきれずに残っている。師が云つ、お前は今日、せつかくの人に遇いながら、その人に遇わなかつたぞ。後、ある人が一歩進めて問つた。せつかくの人に遇いながら、その人に遇わなかつたというのはどういふ意味ですか。師が云つ、せつかくの天子の御馳走を平民の食事として喰べてしまつたのだ。

・久嚮云々 久嚮某々という場合、後に某々という名にひっかけた語の来るのが普通である。たとえば趙州録に問、久嚮趙州石橋、到来只見掠約子」とあるが如し。ここも鏡清すなわち清んだ鏡に対して、紋綵を持って来ている。紋綵は、葉山の伝に、一日師着經次、栢巖曰、和尚休慥人得也。師眷却經曰、日頭早晚。曰、正當午。師曰、猶有這箇文彩在云々」とあるのを参照。それと見て取られるしるし。まだ振つ切れていないシッポ。

問う、源として住せざる無く、路有るも歸らざる時如何。師云く、この師僧、座を得れば便ち坐せよ。

問う、そこに住しない根源はないが、そこに通じる路はあつても歸らない、といつのはどうしてしよう。師が云う、そこのお坊さん、席があつたら坐るものだ。

・臨濟の 有一人論劫在途中、不離家舍。有一人離家舍、不在途中。那箇合受人天供養」といつ上堂の語を参照。

問う、如何なるか是れ心。師云く、是は則ち第二頭。云く、不是は如何。云く、又た不是頭を成す。僧云く、是と不是と惣に与摩ならざる時作摩生。師云く、更に饒過多し。

問う、心とはどういふものであるでしょう。師が云う、第二の頭だ。云う、ではないはどうしてしよう。師が云う、またでないものになる。僧が云う、である「とでない」とがすべてそうではない時どうしてしよう。師が云う、なおさらありあまり過ぎぬ。

・更多饒過 必要にして十分を超えている。

問う、如何なるか是れ玄中の玄。師云く、是ならざるは是れ什摩ぞ。僧曰く、還た當ることを得るや。師云く、木頭も也た語ることを解く。此れに因りて頌ありて曰く、一向に他に隋つて走り、又た我が是ならざるを成す。設し洸与摩ならざれば、他の牽匱を傷着せん。省要を會せんと欲得せば、二途俱に綴する莫れ。

問う、玄中の玄とはどういふものですか。師が云う、そうでないものは何だ。僧が云う、そういつこととでびたりと行けるのですか。師が云う、木でもものが云える。此れに因んで頌を作つていつひたすら彼の玄中の玄を追つて走つて行くと、今度は「うちがそつではないといつことになる。たといそついつやり方をやらないとしても、今度は彼の玄中の玄の牽匱を傷つけることになる。もしかなめを會得したいならば、二途ともにかわつてはなざらぬ。

・還得当世無 そつでないものの方から探りを入れて行くと、玄中の玄がつかまえられるのですか。不是の方から行けばよろしいで

すか。

・木頭也解語 玄中の玄ならざるもの代表として木をあげた。木にものを云わせることができれば話しは別だが。

・牽匱 不明

問う、古人言有り、人に心の道に合せんとする無しと。如何なるか是れ人に心の道に合せんとする無し。師云く、何ぞ問わざる、道に心に合せんとする無しと。如何なるか是れ道に心に合せんとする無し。師云く、白雲乍る青嶂むしに来る可きも、月那んぞ碧天より下るに堪えんや。

問う、古人が云つております。人には道に合しようとする心はないと。人には道に合しようとする心はない、とはどいつのことですか。師が云う、何故、道には人に合しようとする心はない、といふことについて問わないのだ云う、道には人に合しようとする心はない、とはどいつのことですか。師が云う、白雲は青山のところまで降りて来られるが、明月はどつして碧天から下りてこられようか。

・古人 洞山(五冊目一四一〜一四二頁)

新到参する次いで、師問う、閻梨什摩の処より来たるや。对えて云く、佛国より来たる。師云く、只だ佛の如きは何を以て國と為すや。对えて云く、清浄莊嚴をば國と為す。師云く、國は何を以て佛と為すや。对えて云く、妙静真常をば佛と為す。師云く、閻梨妙静より来たるや、莊嚴より来たるや。僧对答せざるはなし。師云く、嘘嘘、別処に到り、人有つて汝に問つても、這個の語話を作す可からず。

新到の参じた折り、師が問う、お前さんどこから来られたか。こたえて云う、佛國から参りました。師が云う、佛は何を國とされておるか。こたえて云う、清浄なる莊嚴を國とされておる。師が云う、國は何を佛としておるか。こたえて云う、妙静なる真常を佛としておる。師が云う、お前さん、妙静から来たのか、莊嚴から来たのか。僧はおよそ答えないといふことはなかった。師が云う、嘘嘘、どこかで誰かがお前さんに聞いても、こんなものの云い方をしてはならないぞ。

師時有つて上堂す。衆集る。良久して云く、来朝更に楚王に献じ看よ。珍重。

ある時の上堂のこと。修行僧たちが集まって来る。しばらくの沈黙の後、師が云つ、あしたもう一度、楚王に玉を献じてみなさい。おだいに。

問つ、明能く相い見る、其の理如何ん。師云く、惜しむ可し、汝が与に道却せり。僧曰く、只だ惜しむべし道却せりの如きは、意旨如何ん。師云く、珍を慳しむは施すを免れず。如何なるか是れ珍を慳む。師云く、惜しむ可し、道つこと。僧曰く、施すを免れず、又た如何ん。師云く、汝に対して道却せり。

問つ、澄んだ目が相手を見てとる、とはどういふ道理をいつのですか。師が云う、おしいことにお前さんのために言い切ってしまった。僧が云う、それでは、おしいことに言い切ってしまった、とどういふとはおしいことですか。師が云う、宝をおしむと、施すことになると。僧が云う、宝をおしむとはどういふことですか。師が云う、宝をおしむとはどういふことですか。師が云う、惜しいことに言い切ってしまった。僧が云う、施すことになると、とはそれではどういふことですか。師が云う、お前さんのために言い切ってしまった。

問つ、寶の衣中に在るに什摩と為てか伶俐辛苦せる。師云く、過は阿誰にか在る。僧曰く、只だ認得するが如きは又た作摩生。師云く、更に是れ伶俐す。僧曰く、認得して什摩と為てか伶俐する。師云く、己有を佐じざればなり。

問つ、自分の衣服の中に寶があるのに、どうしておちぶれて苦労したのですか。師が云う、過は誰にあるのだ。僧が云う、それでは衣中の寶を見て取った場合、こんどはどうですか。師が云う、なおおちぶれておちぶれている。僧が云う、見て取ったのに、どうしておちぶれるのですか。師が云う、自分が所有していることをはしないからだ。

・宝在衣中云々 衣中の寶珠の話は法華経五百弟子受記品に、伶俐辛苦の話は信解品に見える。

・不佐己有 佐には感謝するという意味もある。しかし否定詞のついたものはあまり用例を見ない。

問う、如何なるか是れ皮。師云く、分明个底。如何なるか是れ骨。師云く、綿密个。如何なるか是れ髓。師云く、更に密よりも密。

問う、皮とはどついつものですか。師が云う、明らかなものだ。骨とはどのようなものですか。師が云う、密度の高いものだ。髓とはどついつものですか。師が云う、それよりも更に密度の高いものだ。

・皮骨髓 達摩の伝記を見よ。

問う、如何なるか是れ糞掃の一納衣。師云く、迦葉被し来ること久し。進んで曰く、納衣下の事如何ん。師云く、親しく阿難に付して傳つ。

問う、糞掃の一納衣といつのはどついつものですか。師が云う、迦葉が久しく被<sup>ま</sup>て来た。進んで云う、納衣下の事はどつですか。師が云う、じぎじぎに阿難に伝えた。

問う、如何なるか是れ天龍の一句。師云く、汝が大膽に伏す。進んで曰く、与摩ならば則ち字人一步を退かん。師が云く、覆水收め難し。

問う、鏡清和尚の一句はどんなものですか。師が云う、お前さんの大膽さには恐れいった。進んで云う、そついつことならわたしは一步をがりましよう。師が云う、もう手おくれだ。

問う、如何なるか是れ文殊の劔。師便ち斫る勢を作す。只だ一劔下に活を得る底の人又た作摩生。師云く、出身の路険し。与摩ならば則ち大いに畏るべし。師云く、驚怛するに足らず。

問う、文殊の劔といつのはどついつものですか。師は切ってかかる格好をする。一劔下に活を得るような人間はどつですか。師が云う、出身の路はけわしいぞ。とすゑと恐れいことですね。師が云う、驚くには足らん。

・文殊劔 大宝積經一〇五參照。

師僧に問う、外辺は是れ什摩の聲ぞ。学人云く、雨滴聲。師云く、衆生は己に迷つて物を逐う。学人云く、和尚は如何ん。師云く、顔んど己に迷わざらんとす。後、人有つて問う、和尚と摩に道う、意作摩生。師云く、出身は猶お易かるべきも、脱体に道うことは還つて難し。

師が僧に問う、外のはあれは何の音だらう。僧がこたえる、雨だれの音です。師が云う、衆生というものは己を見失つて外物を追うものだな。僧が云う、和尚さんはどうですか。師が云う、なんとか己を見失わずにいる。のちある人が問うた、和尚さんあのようにおっしゃったのはどういふつもりですか。師が云う、悟ることはまだやさしいが、その境地をそのままに言いとめることはかえつてむずかしい。

・衆生迷己逐物 首楞嚴經卷二「一切衆生從無始來迷己為物。失於本心、為物所轉。故於是中觀大觀小。若能転物則同如来」大正  
大藏經一九 一一一c。

・顔不迷己 かるつじて己を見失わずにすんでいる。すんでに己を見失つところだった。やっとそつならずすんだ。

・脱体 副詞。身ごとく、身ぐるみ。なお入矢義高「雨垂れの音」求道と悦樂所収參照。

師又た僧に問う、什処いすこを離れたるや。学云く、應天を離る。師云く、還た鰻鯉を見しや。学人云く、見す。師云く、閻梨が鰻鯉を見ざるか、鰻鯉が閻梨を見ざるか。云く、惣に与摩なること有り。云く、閻梨は只だ初めを慎むことを解よくして、未を護ることを解よくせず。

・応天 夢溪筆談に「越州応天寺有鰻井」とある。

・不見 鰻など私は目もくれない。

・惣有与摩 どっちもです。

師示衆して云く、好晴、好雨。又た云く、好晴の為に好晴と道わず。好雨の為に好雨と道わず。若し語に随つて會せば、神機を迷却す。僧

問つ、未審<sup>いぶか</sup>し、師の尊意如何ん。頷に曰く、好晴好雨は奇なる行持なり、若し語に随つて會せば今時に落つ。談玄は只だ塵中の妙を要す、妙を得れば還つて伊<sup>かれ</sup>を惜しまざるに同じ。

・不為好晴道好晴 好晴だからといって好晴とは言わん。

・若隨語會 好晴だからといって好晴と言えよ。

・落今時 商量している今という時点に限定される。

・伊 玄。

問つ、經首第一、喚んで何んの字と作すや。師曰く、穿耳の胡僧笑つて點頭す。

問つ、西來の密旨如何んが通信せん。師云く、一人の口より出でて、千人の耳に入る。如何なるか是れ一人の口を出づ。師云く、釈迦は説かずして説く。如何なるか是れ千人の耳に入る。師云く、迦葉は聞かずして聞く。

・如何通信 和尚さんはどのようにそれを伝達しますか。

問つ、学人納を被せんと擬<sup>ほう</sup>す。師の意如何ん。師云く、高飛するに一任す。僧曰く、毛羽の未だ備わらざるを争奈何んせん。師曰く、唯だ宜しく低弄すべし。僧曰く、如何なるか是れ低弄。師云く、縁に逢うも作さず、境に対するも無心。僧曰く、如何なるか是れ高飛。師云く、目に優曇を覩るも猶を黄葉の如し。如何なるか是れ優曇。師云く、一劫に一現す。如何なるか是れ黄葉。師云く、此れ未だ真と為さず。僧曰く、与摩ならば則ち更に向上の事在る有り。師云く、灼然たり。如何なるか是れ向上の事。師云く、蓑が一口に鏡湖の水を吸盡するを持って、我は則ち蓑に向かつて道わん。

問う、惺惺たるに什摩と為てか却つて熱惱さる。師云く、是れ那邊の人ならざるが為なり。僧曰く、如何なるか是れ那邊の人。師云く、這辺に過ぎ来れ。僧云く、未審し這辺に如何んが過ぎん。師云く、惺惺として不惺惺。僧曰く、惺惺として不惺惺の時如何ん。師云く、魯班は手を失却す。

・惺惺不惺惺 後世諺になっている。かしこい人はかしこさを外へ出さない。不惺惺はここでは熱惱を被ること。

・失却手 うっかりしくじる。

問う、如何なるか是れ声色中の面目。師云く、現人見ず。僧云く、太綿密生。師云く、躰自から此の如し。僧云く、学人如何んが趣向せん。師云く、活人は機に投ず。

・現人 不詳

・躰自如比 本体がもともとそうなんだ。

・活人投機 このような趣向の仕方をせよ。投機はつぼをはずさない、ポイントを逃さない。うまが合うところにすつと入るのが投。問う、聞処は什摩と為てか只だ聞きて見ざる。見処は什摩と為てか只だ見て聞かざる。師云く、各各自ら縁りて他に縁らず。

質問する、聞く場合はどうして聞くだけで見ないのですか。見る場合はどうして見るだけで聞かないのですか。師が答えて云つ、それぞれ自体で対象の決め方をするのであつて、他のものを借ることはない。

・各各自縁不縁他 目は目自体で対象を決める。耳の世話にはならん。

師 象骨山と題し、頌して曰く、密密誰か要を知らむ、明明許さむや。森羅本性を含み、山岳盡く如如たり。

師は象骨山と題して頌して曰う、密密の要は誰が知ろつか、明明たるところが正にそれだということもできない。森羅は密密に本性を

含み、山岳は明明に尽く如如である。

・象骨山 雪峯を暗示。雪峯の家風は、密密という点からも、明明という点からもアプローチできない。そこを如如といっている。

問う、十二時中、如何んぞ行李せん。師云く、一步も移すを得ず。僧曰く、学人不會、乞つ師、今の入路を指示せよ。師云く、此に過ぎず。乃ち頌して云く、此に當りて支荷し得れば、歴劫の功に勝る。多途なれば終に到らず、一路に妙に圓通す。

質問する、四六時中どのように修行したらよいのでしょうか。師が答えて云う、一步も足を運んではいけない。僧が云う、私にはわかりません。どうかヒントを示してください。師が云う、此れ以上のものはない。師はそこで頌して云う、此の点についてぴたりと背おいきれたら、歴劫の功に勝る。多途にわたれば決して目的には到達しない、一路こそが妙に圓通するのである。

・一步不得移 そこを動かぬ。

・不過於此 此れつまり一步不得移以上のものはない。

・當此支荷得 「此」は先の「此」と同じく一步も動かないことを指す。支荷は承当すること。

師僧に問う、養の名は何摩ぞ。対えて云く、省超なり。師便ち偈を作りて曰く、省超の時守住せず、更に須く騰身して前機を後にすべし。太虚は金鳥の運るを奪わず、霄漢は寧んぞ玉兔の飛ぶを妨げん。

師が僧に尋ねる、おまえの名は何と云うのだ。答えて云う、省超です。師はそこで偈を作って云う、省超の時には、その省超に（じつと）どまらず、もつひとつ躍り上がって前機を後にしなければならない。太虚は金鳥（太陽）の運るのを妨げないし、霄漢は玉兔（月）の飛ぶのを妨げない。

・省超 省悟し、現在の自分の次元を超えること。省超と云う名に因んで偈を作った。

師因みに帳裏に在りて坐す。僧問う、乍入樓林なり、乞う師、个の徑直の路を指示せよ。云く、子は既に此くの如し、吾れ豈に之を怪まんや。近く前み來れ。学人遂に近く前む。師手を以て帳を撥開して云く、嗚、学人礼拜し、起ちて云く、某甲、个の入処を得たり。師遂に之を審らかにするに渾て意を將て解す。師、乃ち頌して曰く、我れは適抑いまえて已まず、汝領すること急に當たらす。機いま豎つるも尚お投ずることを虧く、影没すれば大いに及び難し。

師は帳の中で坐している。僧が質問する。(私は乍入樓林です。どうかまつすぐな道を示してください。師が答えて云う、おまえがそう云うのなら、自分はどうして)示すことを物惜しみしましょうか。近くへ進んで來なさい。学人はそこで近くへ進む。師は手で帳を払って開き、云う、そらう。学人は御辞儀をして、起つて云う、私は入り口がわかりました。師がそこで調べて確かめてみると、すべて思慮分別で理解していた。師はそこで頌して云う、自分は今たまたま抑えきれず、に示したのに、おまえの理解のし方は命がけのものとしてとらえようとしているのではない。(自分は機をせつかく豎っているのに、おまえはそれに乗ってくることを欠いている。(本体のみならず)影が消えてしまつたらもつ及びもつかないのだ。

・ 嗚 そら、徑直の路はここにある。

因みに挙す、長慶上堂す。衆僧立つこと久し。僧有り出で來つて云く、与摩なれば則ち大衆は堂に歸し去らん。長慶便ち打す。後に僧有り、中招慶に挙似す。招慶云く、僧は何摩と道いしぞ。對えて云く、僧は語無し。招慶云く、這個の師僧は衆の為に力を竭し、禍、私門より出づ。尋いで後に僧有り、化度に挙似す。化度却つて其の僧に問う、只だ長慶、這個の杖を行するが如きは還た公当なるや。對えて云く、公当なり。化度云く、或いは人有りて公当ならずと道わば又作摩生、對えて云く、若し是れ与摩の人ならば、他かれに出頭するを放して始めて得ん。化度云く、秦に在りては則ち秦を護る。化度却つて師に挙似して云く、只だ長慶に与摩の次第有るが如きは、不合に這個の窟杖を行じたり。師云く、大師は長慶に代わり、作摩生か折合せん。化度云く、但だ起ち來つて東行西行す。師云く、与摩なれば則ち木杓は這個の師僧の手裏に落ち去るなり。時に人有り、拈じて師に問う、只だ長慶の這個の窟杖を行するは、意作摩生。師云く、宗師は老促、兼ねて自ら出身す。

因みに挙す、長慶が上堂する。衆僧は立ったままで時間が経った。ある僧が出て来て云う、では大衆は堂に帰りましょう。長慶はとたんにその僧を打った。後にある僧が中招慶に挙似する。招慶が云う、その僧は何と言ったか。質問した僧が答えて云う、その僧は何も言いませんでした。招慶が云う、この僧は大衆の為にどうにかやってみようとして、禍を足もたら招いたのだ。その後にある僧が化度に挙似する。化度はその質問した僧に問い返す、長慶がこの杖を行じたのは正当であるのか。僧が答えて云う、正当です。化度が云う、もし誰が正当でないと言つ人があればどうなのだ。僧が答えて云う、もしそついう人があれば、その人にここに出てきてもらいましょう。化度が云う、秦に在るのなら秦を護るのだ。化度はまたそれを師に挙似して云う、長慶にこのような次第があつたが、ふとときにも窟杖を行じたのでしようね。師が云う、大師は長慶に代わつてどのようにしめくくりをつけるのか。化度が云う、起ち上つて行つたり来たりするだけです。師が云う、それでは柄杓はこの打たれた僧の手中に落ちてしまつたらう。またある人が師に質問する。長慶がこの窟杖を行じたのは、その意味はどうでしょうか。師が答えて云う、宗師は老促し、同時に自分で出身したのだ。

・ 中招慶 招慶道匡のこと。傳燈録「第二十一卷」、祖堂集「第十三卷」。

・ 公当 俗語で正当の意。

・ 或有人道不公当 ここで化度が「不公当と言つ人があればどうだ」と質問しているのは暗に化度自身が不公当だとしていることを示す。

・ 在秦則護秦 出典不明。南方の越に対して、北方には北方のやり方があるということか。

・ 折合 しめくくりをつける。

・ 木杓 悪水をひっかける杓(?)。

・ 老促 意味不詳。

師は又の時上堂して云く、尽十方世界は都来是れ金剛不壞の体にして、唯だ纂羊の角を怕るるのみ。

時に人有つて問う、如何なるか是れ金剛不壞の体。師云く、世界の壞する時作摩壞せん。什摩と為てか唯だ纂羊の角を怕るのみなる。師云く、汝の尽却せんことを要す。如何なるか是れ纂羊の角。師云く、道つに顔んで汝を驚殺せん。僧曰く、体の壞する時、角は還た存するや。師云く、是れ夏を過こす物ならず。僧曰く、只だ纂羊の角の尽くる時の如きんば、還た相応するを得るや。師云く、汝が歸意に同じからず。僧曰く、歸意に同じからざる者は如何ん。師云く、千金も耕を改めず。僧曰く、只だ纂羊の角の如きんば、什摩辺の事を明らめ得るや。師云く、上士は聊さか聞きて便ち了却するも、中下は意思するも知ること能つ莫し。

人有つて拈じて資福に問う、作摩生か是れ金剛不壞の体。資福は手を以て胸に点す。作摩生か是れ纂羊の角。資福は手を以て頭上に羊角の勢を作す。

人有つて師に拳似す。師は此れに因りて衆に示して云く、角惠は密ならずして太露太現。金剛不壞、唯だ纂羊の角を怕るのみとは。其の角を提して、只だ其の体を出ださんと要す。体角俱に備わる。諸人は作摩生か会せん。

又た談体頰に云く、体は衆像を含みて像は分明、体を離れて形を含めば形は転た精し。清明妙淨誰か能く弁ぜん、釈迦は室を揭羅城に掩す。

・金剛不壞之体 涅槃經二二三「如來之身、金剛無壞」。

・歸意 設定された本来のものに歸る。

・千金不改耕 千金もつて天下がお迎えに来ても百姓をやめない。

又た景禅を嘆くに因りて吟ず、汝景禅を嘆くこと何ぞ速き、同道せざると雖も眼目に当たる。今令永劫曾つて虧かず、地水火風は故国に還る。好し也た好し、也た大奇、忙忙たる宇宙は幾人か知らん。瑩淨寧閑として追路絶え、青山綠嶂に白雲馳す。歌は好き歌、笑いは好き笑い、誰か肯えて便ち作さん此中の調べ。難提は既に君と機に湊し、其の旨は其の要に諧わざるは無し。格志は異にして気骨は高く、森羅は咸な会す一靈毫。示作すると雖然も皆な電に同じ、岫を出でて峯を蔵し徒思勞す。希奇地、經の吹毛、脱罩騰籠して性に任せて遊ぶ。此界世界

は水月の如し、幾般に跡に応じて妙に逍遙せん。

・湊機 うまが合つ。

・応跡 お前の跡のままに。

又た悟玄頌に曰く、路の人心を省く有り、学玄の者好みて尋ぬ。機を旋せば体骨を現じ、何ぞ用いん更に沈吟することを。浅くして食わざるを嫌つこと莫れ、猶お意思の深きに勝る。魚に若し竜骨有らば、大小尽く任に堪えん。

・旋機 くるりと機を転回させる。廻光返照のよつな観念。

・不食 魚が餌に食いつかない。

問つ、古人に言つ有り、切に忌む他に随つて覓むることを、逍遙として我と疎ならん、と如何なるか是れ切に忌む他に随つて覓むることを。師云く、令を犯す。如何なるか是れ逍遙として我と疎ならん。師云く、畜に十万八千里なるのみに非ず。如何なるか是れ我れ今は独自に往かん。師云く、単馬騎しく騎る。如何なるか是れ処処に渠に逢つことを得。師云く、遍身是れ眼。如何なるか是れ渠は今正に是れ我。師云く、可殺はなはた端的。如何なるか是れ我は今是れ渠ならず。師云く、奴郎を識弁して始めて得たり。

問つ、古人が言つております、決して彼を追い求めてはならぬ、はるかに我とつとくならずつと、とどついつのが決して彼を追い求めてはならぬ、とどついつとでしようか。師が云つ、命令に違反する。とどついつのが、はるかに我とつとくならずつと、とどついつとですか。師が云つ、十万八千里どころではない。どついつのが、我は今ひとりで行こう、とどついつとですか。師が云つ、単騎ひとり行く。とどついつのが、どこでも彼に会うことができる、とどついつとでしようか。師が云つ、身体じゅう眼だらけ。とどついつのが、彼は今正に我である、とどついつとでしようか。師が云つ、はなはた確かだ。とどついつのが、我は今彼ではない、とどついつとでしようか。師が云つ、奴隸と主人とを見分けてこそ合格だ。

・古人有言 洞山の渡水の偈(二一 一五頁)。

・ 十万八千里 長安から王舎城までの距離。文苑英華八六一東都聖尊寺無畏三蔵碑。

・ 識弁奴郎始得 ものけじめのつかないことを、奴郎不弁」と言い、とりちがえることを、認奴作郎」と言つ。

翠巖和尚、雪峯に嗣ぐ、明州に在り。師、諱は令參、湖州の人なり。未だ行録を覩ず。錢王欽仰して紫と永明大師を賜つ。

問つ、三寸を借らずして、請う師の道わんことを。師云く、茶堂裏に貶剥し去れ。

質問する、口先によらないで、おっしゃってください。師が云つ、人をけなすならお茶飲み場でやれ。

・ 茶堂 禅堂とか道場ではなくて、禅堂の控室。お茶飲み場である。禅林象器箋に、「茶堂必在法堂後、寢堂前」とあり、用例として、

「鼓山神晏国師録云、師見保福共僧在茶堂説話。師云、莫葛藤」とある。

・ 貶剥 人をくさすこと。貶駁とも云つ。言柱を超えたところをあげつらつことを、人をくさすことにたとえたものである。

問つ、諸余は即ち敢えて問わず。師、良久す。進んで曰く、如何んが人に拳似する。師云く、侍者、燈を点し来れ。

質問する、ほかのことはお尋ねしますまい。師はしばらく黙っておられた。進んで曰つ、どの様に人にお示しなさいますか。師が云つ、侍

者よ、あかりをつけて持ってこい。

・ 諸余即不敢問 ストレートに、要のところをおっしゃってください、と云う意。

・ 点灯来 人に示すその仕方が、師のこの答えである。伝灯録は「点茶来」とある。

師有る時上堂して曰く、三十年來、一日も兄弟と持論語話せざること有ること無し。我が眉毛を看よ。還た在りや。衆無對。人有つて長慶に拳似す。長慶代わつて云く、生ぜり。

師がある時、上堂して言った、三十年間、一日として君達と議論しなかつた日はなかつた。どうだ、私の眉毛はまだ残っているかね。衆は答えなかつた。ある人が長慶にこの話しを示した。長慶が代わつて云つ、生えた。

・看我眉毛還在摩 邪法を説くと眉毛が抜けおちるといふ。碧巖録八則參照。

師後学に示す偈に曰く、門に入りては須らく語有るべし、語らざれば病経蘆なり。応に須らく満口に道うべくも、有無を帯びせしむる莫れ。明照和尚和す、入門の通俊の士、正眼もて密に珠を呈す。機に当たつては電拂の如くして、方て病経蘆を免かる。師 再び和す、入門は電拂の如く、俊士合に無を知るべし。頭を廻らして却つて我に問つに、終に是れ病経蘆なり。

・病経蘆 宝蔵論大四五 一四四上に、夫進道之由 中有万途、困魚止漚 病鳥経蘆 其一者不識於大海、不識於叢林、人趨乎小道、其義亦然」とあるによる。

・通俊士 卷九羅山伝に、接物心機、須通俊士、心時如風、心機如電」とある。

師 又た勸学の偈あり、苦なるかな甚だ苦なるかな、波裏に乾灰を見むるは。君に勸む手を収取せんことを、正に与摩の時に徠たらん。

師に学道をすすめる偈があつた。やれやれ何ともやりきれぬわい、波の中に乾いた灰を見めるようなことは。手を引っ込めなさい、そうすればやつて来るでしよつ。

報恩和尚、雪峯に嗣ぐ。師、諱は懷岳、泉州仙遊の人なり。謬田の聖寿院に出家す。依年具戒し、祖庭を志慕して雪峯に参見す。密に玄関に契い、柔浦に化す。

問つ、宗乘却けずして、如何んが拳唱する。云く、山は自ら称せず、水は間断無し。

・不却 不立文字としてどこか入置くとしようなことをしないで。

師 遷化に臨みし時、上堂して云く、十二年来宗教を拳揚す。諸人、我が什摩の処をか恠む。若し三經五論を聴かんと要せば、開元は咫尺なり。便ち寂を告ぐ。

師は遷化する時に、上堂して云う、十二年間、宗教を拳揚してきましたが、私のどこがおかしいと思つか。經論について聞きたいのなら、開元寺が近い。そついつて寂を告げられた。

・十二年 ひとめぐりくらの意で、実数と見なくてよいであらう。

・恠我什摩処 おかしいとおもう所があつたら今ききなさい。それが經論についてのことならば、開元寺が近いからそこに行つてきなさい。

化度和尚、雪峯に嗣ぐ、西興に在り。師 諱は師郁 泉州護田県の人なり。師 悟真大師と号す。

僧問つ、如何なるか是れ随色の摩尼珠。師云つ、青・黄・赤・白。如何なるか是れ随色ならざる摩尼。師云つ、青・黄・赤・白に非ず。

問つ、如何なるか是れ一塵。師云く、九世刹那の分。如何にしてか法界を含む。師云く、法界什摩の処にか在る。

・九世刹那分 師は質の転換をやっている。

問つ、六国未だ寧からざる時如何ん。師云く、是れ汝。寧き後如何。師云つ、是れ汝。

質問する、六国が平安でない時はどうですか。師が云つ、ほかでもない、お前だ。平定の後はどうですか。師が云つ、ほかでもない、お前だ。

問う、只だ維摩の登時、或は人有って問わば、和尚、如何んぞ祇遣するや。師云く、唯だ門前の鏡湖の水有り、清風は旧時の波を改めず。

・登時 当時と全く同じ。一、そのとき。二、ただちに。

・如何祇遣 維摩をどうあしりますか。

鼓山和尚、雪峯に嗣ぐ、福州に在り。師諱は神晏、梁国に示生す。世姓は李氏、則ち皇唐諸王の裔なり。幼くして輩妄を避け、鐘梵を聞くことを楽しむ。年始めて十二にして、俗舎青灰の壁に忽ち白氣數道を顯わす。父曰く、此の子必ず出家せんと、年十五に至りて偶ま疾を抱くに因りて、神人の藥を与つるを夢む。睡り覺めて頓に愈ゆ。年十七にして一胡僧を夢む。告げて云く、出家の時なり、と。後に至り、累りに親愛を辞し、方めて其の願いを果たす。遂に衛州白鹿山卯齋禪院の道規禪師に依りて剃落す。

中和二年に至りて、高山の瑠璃壇に於いて受戒す。因みに一日、同学に謂いて云く、古徳云く、纔に白四羯磨してより後、全体戒定慧なり、と。何ぞ必ずしも準繩に拘戀せん。猶お桎梏に同じ。此れより律肆を窮めず、羸を擁して遍く参す。先に白馬、趙州に見え、次いで径山、荷玉に歴す。請問に諧つと雖も、未だに機縁に契わす。

中和二年にいたつて、高山の瑠璃壇において受戒した。そこである日のこと、同学にむかつて云つた、白四羯磨したとたんに、まるごと戒定慧たと古徳も云つている。桎梏とかわりない規律にこだわる必要はなからう。以来、律を学ぶことを止め、羸衣を着てあまねく参禅してあるいた。まず白馬和尚、趙州和尚に参じ、次いで径山和尚、荷玉和尚に参じた。こちらの質問には答えてくれたけれども、いまだ機縁にはかなわなかつた。

後ち雪峯に遇う。雪峯、胸を促して把住して云く、是れ什摩ぞ。師乃ち豁然たるのみ。尋いで便ち拳手揺結す。峯云く、又た道理を作して什

摩をか作す。師云く、何の道理をか作せし。峯乃ち呵して曰く、大いに人有つて此の境界に到れり、切に須く保任して護持すべし。

のち雪峯に参じた。雪峯は胸ぐらつかんで云つた。なんだ。すると師は豁然としただけであつたが、すぐに手をあげてひらひらさせた。雪峯が云つ、いったいわくあり気なことをしてみせてどうしようというのだ。師が云つ、どんなわくをしたのでしょうか。そこで雪峯は大声で云つた。よくまあこの境界にまで達したものだ、大事にして護持せねばならない。

・豁然而已 而已の二字がない方が、下の句につながり易い。というのは、拳手揺結という動作は、豁然としたところからごく自然に、すぐに出て来た動作であるところからである。そこがまたどんな道理をしたかという切り返しの出て来た所以でもある。

・大有人未到此境界云々 今は未の字をとつて読む。大有という云い方は、下にくる事実を強調する云い方で、中唐、晩唐に特徴的な語法であるが、下に否定の句の来る例は全くない。ある「といつ」ことをポジティブに突き出すのであるから、下の「未」の字でひっくり返されては立つ瀬がない。

尋いで雪峯の寂に順うを以て、恥王、城左二十里に於いて鼓山を開き、師に衆の為にせんことを請ふ。師云く、經は徑師有り、論は論師有り、律は律師有り。函有り、号有り、部有り、帙有り、各おの人有つて傳持す。若し是れ佛と法とならば、是れ建立の化儀、禅と道とならば是れ止啼の説、他の諸聖興來するは蓋し人心等しからざるが為なり。巧みに方便を開き、遂に多門を展ぶ。病同じからざるが為に、処方固より異なる。有に在りては有を破し、空に居りては空を叱す。二患既に除かば中道も須らく遣るべし。鼓山所以に道う、句は機に當らず、言は事を展ぶるに非ず。言を承くる者は畏い、句に滞れば則ち迷う、と言前にすら唱えず、寧ろ句後に談ぜん。直に釈迦室を掩い、淨名口を杜するに至る。大士の梁時、童子の當口、一問、二問、三問、盡く人の了する有るなり。諸の仁者作摩生。時に人有つて禮拜す。師云く、高声に問え。学云く、和尚に諮す。師便ち出でよと喝す。師頌して曰く、直下すら猶お會し難し、言を尋ぬれば轉た更に兩し。佛と祖とを論せんと擬せば、特地に天涯を隔つ。

隆壽和尚、雪峯に嗣ぐ、柔州に在り。師、諱は紹郷、姓は鄭、泉州謏田県の人なり。師、興法大士と號す。

人有つて問う、古人道う、摩尼寶殿に四角有り、一角常に露われ、三角も亦た然り、と如何なるか是れ常露底の角 師便ち拂子を竖起す。

・ 古人 不明

・ 露 屋根から外にはみ出している。

問う、良禾、米を立てず。如何にしてか万人の飢えを濟わん。云く、俠客面前、劔を奪つが如し、君を見るに是れ黠兒郎ならず。

安国和尚、雪峯に嗣ぐ。福州に在り。師、諱は弘韜、姓は陳、泉州仙遊縣の人なり。初誕の時、胎衣紫色あり。朝に胡僧にして之を來訪するを感ぜり。出家を志求し、遂に龍華寺の東禪に於いて、師に依りて染剃す。依年具戒し、便ち雪峯に詣り、密に玄關に契つ。尋いで甌越を離れ、遍く楚吳を歴す。

後、再び雪峯に入る。雪峯纔に見て便ち問う、什摩の処より來たる。師云く、江西より來たる。峯云く、什摩の処にか達摩に逢見せる。師云く、分明に和尚に向かつて道えり。峯云く、什摩をか道いし。師云く、什摩の処にか去り來たる。

のち再び雪峯山に入った。雪峯は姿を見るや否や問うた、どこから來たか。師が云う、江西から來ました。雪峯が云う、どこで達摩に逢つたか。師が云う、はつきりと和尚さんに云いましたよ。雪峯が云う、なにを云つたか。師が云う、どこへ行って來たか。

・ 什摩処去來 雪峯と達摩とを掛け合せているのである。達摩を雪峯にぶつけかえしたわけである。人にどこに行つてたかと問う前に、和尚さんこそどこへ行ってたのかと達摩は云つてましたよ。

又た因みに一日、峯師を見て、便ち促胸に把して云く、盡乾坤是れ个の解脱門、手を結いて伊かれをして入らしめんとするも、争奈んせん肯えて入らず。師云く、和尚某甲を恠すること得ず。峯云く、此くの如しと雖然いえども背後そこはく如許多の師僧を争奈何んせん。

またある日のこと、雪峯は師を見るや胸ぐらつかんで云うた、盡乾坤が解脱の門だ、手をひいて彼を入れようとするのだが、どうしようもないのは入ってくれよとせんのだ。師が云う、和尚さん、わたしを怒ったってどうしようもないですよ。雪峯が云う、それはそつだが、うしろにひかえているお坊さんがたをほっとくわけにはゆかない。

自後、恥王欽敬し、安国に住して宗教を闡揚せんことを請えり。

問う、如何なるか是れ西來の意。師云く、如何なるか是れ西來せざるの意。又云く、是なることは即ち是なるも、錯つて會すること莫れ。

問う、学人上来す。未だ其の機を盡くさず、請う、師、其の機を盡くせ。師良久す。学人礼拝す。師云く、忽ち別処に到り、人有つて汝に問わば作摩生か拏せん。学云く、終に敢えて錯つて拏せじ。師云く、未だ門を出ざるに、便ち笑具を見たり。

・学人の問いは謙遜しているようであつて、その実非常に氣負ひ立つたものである。すなわち、「わたしに内在しているあらゆる可能性がまだ十分に發揮されておりません。發揮されていないところをひとつ和尚さんに發揮させていただきましょつか」といつのである。師の良久に対して礼拝したのは、師によつて自分の機を盡くしたところを見せたわけである。「今のその礼拝ぶり、他の人の点検にどこまで耐えうるか試された時お前さんどうするか」「慎重にやります」では、ぜんぜん答えになっていない。「まだ門を出ないうちから、いい笑い草になつてゐる」。

問う、如何なるか是れ達摩傳つる底の心。師云く、素より後胤に非ず。

・素非後胤 達摩の傳えた「心」をみこもって生まれたわたしではない。

衆參。師云く、若し白納衣有らば一時に染却せん。時に於いて衆中より一僧を召し出す。陽に當つて立つ。師指して云く、這個は是れ様子なり。還た人有つて相似するを得るや。衆皆な無對。別時に僧侍立す。師云く、衰此の時に當つて作摩生。僧云く、某甲向前の僧邊に立ちて云わん。還た相似するを得るや。師云く、衰相似せず。学人云く、什摩と為てか相似せず。師云く、衰は黒を帶す。

衆參。師が云つ、もし白納衣が居たらすぐさま染めてやろつ。そこで衆中から一人の僧を召し出した。僧は師の真正面に立つ。師は指さして云つ、これは見本だ。どうだそっくりなのがまだ居るか。衆は皆声もなかつた。別時、ある僧が侍者としてはべる。師が云つ、お前さん、その場になつたらどうする。僧が云つ、あの僧のあたりに立つて云いましょつ。どうです、似てますか。師が云つ、お前さん似ていない。学人が云つ、どうして似ていないのですか。師が云つ、お前さん黒をおびているからだ。

・若有白納衣云々 ほんものの坊さんになっていないものがいたら、わしがほんものに仕立ててやる。

・召出一僧 白納衣のサンプルとして一僧を召し出した。

・還得相似摩 当陽にして立つた所で、自分の答えを出してみせた。

・衰帶黒有 けつこつな黒にそまつていて、染め直しのしようもない。原文、衰帶黒有の有の字は、在のつもりで有と書いたものか。とすると作を造とする祖堂集独特の語法と同じような例ということになるつ。

因みに長慶、招慶に在りし時、法堂の東角に立つ次いで、云く、者裏は一個の問いを致すに好し。時に人有つて便ち問つ、和尚什摩と為てか正位に居らざる。慶云く、衰与摩にし來たるが為なり。僧云く、只今作摩生。慶云く、衰の眼を用いて什摩をか作さん。師因みに拏著して云く、他个は則ち与摩に別にはれ个の道理、只今作摩生か道わば則ち得ん。後の安国云く、与摩ならば則ち大衆一時に礼拝し去らん。師亦た代わつて云く、与摩ならば則ち大衆一時に散じ去るも得たり。

長慶和尚が招慶山に居た時のこと、法堂の東の角に立つて云うた。ここで一問ありたいものだ。するとある僧が問うた、和尚さんどうして正位に居られないのですか。長慶が云う、お前さんがそんな風だからだ。僧が云う、今はどうですか。長慶が云う、お前さんの眼なんかには用はない。師はあるときこの話しを挙げて云う、かれの場合はそれなりにまた一つのすじがある。さてわしの今の場合、ここでどう云えばよいか。後の安国和尚が言う、それなら大衆はすぐさまおじぎをしましょう。師が代わって云う、それなら大衆はすぐさま解散してかまわない。

・ 与摩来 長慶が東角に立っているというように限定して質問して来たことをいう。ではその限定をはずした口今はどうですか、というのが次の問である。眼は限定する眼。

・ 他个 珍しい用例。長慶を指す。

師衆に在りし時、国師の碑文を挙す。云く、之を心に得れば伊蘭も梅檀の樹と作り、之を言に失えば甘露乃ち斋悽の園と師拈して僧に問う、一語の中、須らく得失の両意を具すべし、作摩生か道わん。僧、拳頭を提起して云く、喚んで拳頭と作す可からず。師肯わず。拳頭を拈起して云く、只だ喚んで拳頭と作すが為なり。

・ 只為喚作拳頭 拳と呼ぶからこそだ。肯わなかった理由。

問う、如何なるか是れ活人の劍。師曰く、敢えて汝を瞞却せず。如是なるか是れ殺人の刀。師云く、只だ這个是れ。

問う、何が活人の劍ですか。師が云う、せしかくのお前さんのその目をつぶすようなことはよつやらん。問う、何が殺人の刀ですか。師が云う、これこのとおり。

・ 不敢瞞却汝 それが見えないようにしようとは思わない。師の答えは二つとも、お前さんの目が見ているものがそれだ、という意。お前さんの目が見てとるのである。

因みに拳す、西域記に云く、西天に賊有り、佛の額珠を盗む。其の珠を取らんと欲するに、佛額漸く高して取り得ず。遂に嘖めて云く、佛は因中に願有り、我れ佛果菩提を成ぜば、願くは一切貧乏の衆生を濟わん、と佛遂に頭を低くして珠を与えたり。師拈じて衆に問う、這裏に向かつて須く主と作ることを得べし。又た本願に違せずして合に人を濟つこと有るべし、作摩生か道わん。衆無對。師代わつて云つ、願有れば違せず。長慶云く、適来豈に是れ因中の所願に違するや。

・ 向這裏須得作主 泥棒に妥協しないこと。

・ 合有濟人 有の字は落ち着きが悪い。

・ 有願不違 書經に天下違人願という語があるところを踏まえると、有願不違というのは、衆生の願いがあればそれに違わない」と読まねばならないであろう。しかるに、「このコンテキストの中では、本願がある以上それにそむかない」と読むべきであろう。本願にそむかないことがそのまま主となるということである。

・ 適来豈是云々 さきほどの是因中の所願に違つたのではあるまいか。本當に衆生を救つたことになるか。

師上堂して云く、達摩道う、吾れ本と此の土に來り、教を傳えて迷情を救う、と諸人且く道え、是れ什摩の教ぞ。是れ貝多の教なること莫きや。若し是れ貝多の教ならば自ら是れ摩騰立法蘭の二の三蔵、漢の明帝永平年中、已に來り了れり。既に是れ此の教ならざれば、且く是れ什摩の教ぞ。還た人有つて擇び得るや。若し人有つて擇び得れば、便ち出で來り看よ。若し人の擇ぶ無ければ、我れ衰が与に擇はん。這個は便ち是れ納僧詣會する処、得たるや。只だ達摩と摩に道つが如きは、本色行脚人に遇著せば、還た了することを得るや。汝道え、達摩の 事疣什摩の処にか在つて便ち了じ去らざる。我れ如今好悪を識らず。顛倒して汝諸和尚の与に偈を挿し、歌詠して告報するも、尚お察得する能わず。儻若し正令に依らば汝什摩の処に向かつてか會し去らん。何ぞ眉毛を抖疎して、嫡子の精彩を著げざるや。盡乾坤界是れ衰諸人が家風なり。諸人一時に躡取せよ。還た人有つて躡得するや。若し人の躡得する無ければ、只だ与摩に酔慢慢底なること莫れ。什摩の成辨の時か有らん。

大いに須らく努力すべし。

- ・ 拵得 達摩の教はこれだと規定すること。
- ・ 這個便是云々 前後とのつながりがわるい。このままだと、這個は納僧にわかっているところとしてよろしいか、ということになる。
- ・ 本色 ほんものという意味と、生地まる出しという意味とをまじ。
- ・ 達摩事流云々 達摩にどんなことがあってお前たちわからんのだ。達摩には何のとももないのだ。
- ・ 插偈歌詠云々 あぶないやり方だけれども、歌などの方便を用いたやり方でやってもわかって貰えない。なお插偈歌詠の插の字は当て字であるうが、テッチ上ゲルというほどの意味の語か。
- ・ 儻若依於正令 方便でなしに、ずばりそのものというところで示したら、お前さんたちどういつところをそれをつかまえよつとするつもりか。
- ・ 何不抖疎眉毛云々 まゆをぴりぴりさせてちつとは元氣を出さんか。

時に人有つて問う、承るらく、師の言つ有り、盡乾坤界是れ養諸人の家風と。学人這裏に到つて什摩と為てか却つて見ざるや。師云く、是れ養什摩の処に到つて却つて見ざるや。学云く、請う師、指旨せよ。師云く、顔んど放過せんとす。

時にある学人が問う、師が盡乾坤界がお前さんたちの家風だと云われるのを聞きました。ところでわたしはここに到っているのに、いつして見えないのですか。師が云う、そのお前さんがどこに到つていて見えないのだ。学人が云う、どうぞおしえて下さい。師が云う、あやうくゆるむつてやるところだった。

・ 請師指旨 どのこといつのは自分の到つたところである。それを師に指示せよというのは筋ちがいである。どこといつとは自分が規定すべきことである。

又問つ、承るらく、師の言つ有り、若し正令に依らば、汝什摩の処に向かつてか會せん。如何なるか是れ正令。師良久す。学人措く罔し。師云く、信道しんせざるや、什摩の処に向かつてか會するを。

又た別の僧が問つ、師が正令によるならば、お前さんたちどついつとどこでつかまえようとするつもりか、とおっしゃったのをつかがいました。何が正令でしようか。師はしばらく黙つておられる。学人はオロオロする。師が云つ、どついつとどこでつかまえようとするつもりかと云つたではないか。

・罔措 自分自身の据えどころが解らなかつた。

・不信道 どこで会するかと言つたのを信じないのか。

因みに挙す。六祖行者たりし時、劉志略の家に到つて、夜、尼の涅槃経を転ずるを聴く。尼便ち問つ、行者、還た涅槃経を読み得るや。行者云く、文字は則ち読むこと解あわらず、只だ解よく義を説くのみ。尼便ち疑つ所の文字を將つて、便ち之を問つ。行者云く、識らず。尼乃ち輕言して呵して云く、文字すら尚お識らざるに何ぞ解く義を説かん。行者云く、豈に聞道きすや、諸佛の理論は文字に干せず、と因みに挙する次いで、師云く、由お一問を欠く。便ち僧問つ、如何なるか是れ文字に干せざる理論底の事。師云く、什摩所いにか去ゆき来たる。

・由欠一問 主語は尼。

・什摩処去来 どこに行つていたのだ。僧の問は、師の期待した問ではなかつた。

師長慶と江外より再び嶺に入る。路に在りて歇する次で、因みに挙す、太子初めて下生せる時、目に四方を視て、各おの行くこと七歩にして、一手は天を指し、一手は地を指して云く、天上天下、唯我独尊、と慶却つて云く、委せず、太子は登時、實に此の語有るや、為復は是れ結集家の語なるや。直饒たい登時、与摩に道たわざるも、便ち是れ目に四方を視るは猶を嫡子を較す。師問つ、什摩処いか。慶云く、深く闍梨の此の一問を領す。師云く、問を領することは則ち問を領するも太麤生。慶窟杖を拈して三両歩を行き、頭を廻して云く、是れ麤嫡子なることを

妨げず。師云く、錯またず、庵と嫌いしこと。

・較嫡子　もう一息のところまできている。もう一息のところまでしか来ていない。

・什摩処衰　衰は在に同じ。詰問の余声。

・不錯嫌庵　たしかに貴方は私の領問が庵であつたと思つていらつしやる。

長慶和尚、雪峯に嗣ぐ、福州に在り。師、諱は慧稜、抗州海塩縣の人なり。姓は孫、年十三にして出家す。初め雪峯に参見し、学業辛苦なるも多く靈利なるを得ず。雪峯是の如きの次第を見て、他を断じて云く、我れ衰に死馬醫の法を与えん。衰還た甘んずるや。師対えて云く、師の処分に依らん。峯云く、一日に三度五度上来することを用いざれ。但だ山裏の燎火底の樹種子の如(原作知)くに相似て、身心を息却せよ。遠ければ則ち十年、中なれば則ち七年、近ければ則ち三年にして必ず来由有らん。師は雪峯の処分に依り兩年半を過得ず。有る一日、心造して、坐し得ず。却つて院外の茶園を遶ること三匝し了つて樹下に坐し、忽底として睡著せり。覺して了つて、院に却歸し、東の廊下より上り纔に僧堂に入るや灯籠の火を見て、便ち来由有り。便ち和尚の処に去けり。和尚未だ起きず。却つて退歩して法堂の柱に依りて立ち、覺えず失声す。大師聴聞して問つ、是れ什摩ぞ。師自ら名を称す。大師云く、衰は又た三更半夜に者裏に來りて什摩をか作す。對えて云く、某甲別に見処有り。大師自ら起ち來りて門を開き、手を執つて表情を問つ。師、表情の偈を説いて曰く、也大差、也大差、簾を巻き上げ来れば天下に満つ。人有りて我に何の宗を会すやと問はば、拂子を拈起して驀口に打たん。大師便ち安排し了つて、侍者に処分して伊をして粥を煮しむ。粥を喫せし後、侍者をして堂裏に第二粥の未だ行せざるを看て報せしむ。侍者去きて看、來たりて和尚に報す。和尚、師をして堂裏に來たらしめ、槌を打して云く、老漢這裏に在りて住し千七百人を聚得せるも、今日の下、只だ半个の聖人を得たるのみ。明朝上堂を索め、昇座して便ち師を喚ぶ。師便ち出で來たる。和尚云く、昨夜の事、大眾却つて衰を疑つて道つ、两个の老漢預しめ闘合禪を造すと。衰既に見処有り、大眾の前に一句語を道い得ん。師便ち偈有りて曰く、万像の中独り身を露わす、唯だ人自から肯つて乃ち能く親しむ。昔日謬つて途中に向かつて学び、今日看來る火裏の水。

・処分 言いつけ。俗語

・来由 端緒。没来由は、わけもなく。

・心造 造は作のつもりか。五 四五頁にも見える。

・也大差 差はこの場合形容詞でなければならぬが、不詳。

・闘合禪 闘合は、あつまること。

師問う、従上の諸聖、一路を傳授す。請う指示を垂れんことを。師(下に答の字あり)良久す。設礼して退く。雪峯云く、寛洗として大なる哉。此れに因りて便ち招慶に住す。

師 大匠山に久住せる選上座に問う、還た曾つて雪峯山に到りしや。对えて云く、曾つて到らず。師云く、什摩と為てか曾つて到らざる。对えて云く、某甲自ら本分の事有る有り。師云く、作摩生か是れ上座が本分の事。上座納衣の角を拈起す。師云く、只だ這个のみなるか、為當別に更に有るか。对う、和尚は適来、什摩を見しや。師云く、龍頭蛇尾。師代わつて云く、果然として見ず。

師 保福と遊山する次いで、保福問う、古人道う、妙峯頂と。只だ這个のみ便ち是なること莫きや。師云く、是なることは即ち是なるも可惜許。有る僧、鼓山に拈似す。鼓山云く、若し然らざれば、髑髏野に遍く、白骨山に連らん。

・若不然者 可惜許というきびしい批判がなかつたら。

因みに拈す、體師が寂古の曲の偈に曰く、古曲声を発すること雄にして、今古唱つること還た同じ。若し第一拍を論ぜば、祖佛盡く蹤を迷わす。師拈じて問う、只だ祖佛盡く蹤を迷わすが如きは、个の什摩辺の事をか成得する。僧曰く、个の佛未出世時の事、黑豆未生の時の事を

成得す。云く、某甲這裏に到つて、榮いぶか原作去し得ず。未審し、師は如何ん。師代わつて云く、个の痕縫を絶する辺の事を成得す。

・ 体師 如体禪師三一〇五頁。

・ 祖仏尽迷蹤 祖仏のあとが分からなくなる。

・ 痕縫 ひび、裂け目。

僧 忠塔に問う、如何なるか是れ諸佛の師。答えて曰く、一切人識不得。人有つて師に拳似す。師云く、是なることは即ち是なるも、只だ礼三拝を欠く。

・ 識不得 その人に会つてもその人とわからない。

・ 是即是云々 いいことはいいが、三拝があつてほしいところだつた。

因みに僧拳す、雲岳、草鞋を補する次いで、薬山問う、什摩をか作す。岳対えて云く、敗壞を將つて敗壞を補す。薬山肯わずして云く、即ち敗壞 敗壞に非ず。師云く、薬山与摩に道つ、猶お一節を較原作教 下同す。僧問う、和尚は如何ん。師云く、汝猶お一節を較す。僧云く、学人は則ち与摩に和尚に一節を較す。未審し、作摩生ならば則ち師の機を盡すを得ん。師云く、汝親自ら道つを須ちて始めて得ん。時に学人有つて問う、如何なるか是れ敗壞底。師 杖を提起す。如何なるか是れ非敗壞底。師は亦た杖を拳起す。

ちなみに僧が拳す、雲岳和尚がわらしをつくるつてゐる時、薬山和尚がたずねました、なにをしておるのか。雲岳は答えます、敗壞で敗壞をつくるつております。薬山はつべなわずに云つ、敗壞こそ非敗壞なのだ。師が云つ、薬山がそう云つたのはもつ一つ足らぬ。僧が問う、和尚さんはどうですか。師が云う、お前さんももつ一つ足りぬぞ。僧が云う、わたしはいかにも和尚さんにももつ一つ足りません。ではどうしたら和尚さんの機にびつたりかなうことができましようか。師が云う、お前さん自分で云わねばならぬぞ。その時一人の修行者が問つた。何が敗壞底ですか。師は杖を立てる。僧が問う、何が非敗壞底ですか。師はこんども杖を立てる。

・將敗壞補敗壞　すりきれたわらしのすりきれたところを、そのわらしのどこかをもって来て補おうとする。論理的に不可能なこと。

・猶較一節在　原文は猶教一節在。教は較と音通、校という字をもあてる。その一節が補われれば完全になるその一節が足りない。在は句末の強辞。

・未審作摩生云々　足らぬ一節をこちらの方で補完して、師の機に過不足なくびたつと合つにはどうしたらよいかという問意。得盡於師機の盡は、足らぬところを満たして百パーセントにすること。

・汝須親自道始得　お前さんの言葉で、雲岳を超えた言葉をいわねばならんぞ。わしに云わせようというのは筋がよい。このやとりにおける師の答えは、自らも一つだと批評したところの薬山を超えているようには思われない。なお、雲岳と薬山との機縁は、いずれの伝記にも見えない。

問う、古人道う、真金買(原作賣)い受けず、買い受くれば金は真ならず、と。既に買い受く、什摩としてか金は真ならざる。師云く、只だ謾を被るが為めなり。

・よく解らない一段である。まず古人は誰であるか未詳。原文には真金買不受、賣受金不真云々とあつて、賣受という語が使われているが、意味がとりにくいので一応賣受に改めて読んでおく。この話しの背後には純粹な金はとり引きの対象にならないという考えがあつたのであろうか。とり引きによって得た金は不純の金ではない。しかるに真金としての値を拂って買ったのにそれがほんものではないのはどうしてか。それはだまされたのだ。

師時有つて云く、与摩に挙揚するも、背地に看来らば、却つて返仄と成る。僧便ち問う、衆に當つて挙揚せしむ、什摩と為てか却つて返仄となる。師云く、只だ容易なるが為なり。僧云く、容易ならざるは、作摩生か道わん。師云く、當つて當らず。

ある時師が云つ、そのように拳揚しても、こちらから見るとこちらがえしになる。そこで僧が問う、正面きつて拳揚したのになどつしてこちらがえしになるのですか。師が云つ、安易だからだ。僧が云つ、安易でないのはどう云つたものでしょう。師が云つ、ぴたりといつてぴたりといかない。

・ 當不當　こちらがえしのきかない拳揚の仕方。當は合頭におきかえてもよい。当たつて当たらずの拳揚の仕方ではなければならない。云い当てていることが一つの落とし穴になっている。それでは言詮としての定着をしていない。およそ言葉は古今避け得る人はいない何を避けられないか言つて見る。言葉を越えたものを言葉で表詮する場合などついても避けられない、道の当体と言詮とのギャップ。言詮がいかに恐いものであるかといつて言つている。言語の背負つてゐる限界をこちらがはずしてやらねばならぬ。そこが並並ならぬ。

問う、如何なるか是れ万法の源。師云く、未だ我を恠しむことを用いざれ、只だ這个是れ。僧便ち礼拝す。師却つて云く、忍し人<sup>も</sup>有つて与摩に道つを肯わざれば、衰は還た肯つや。衰若し肯わば、過什摩の処にか在る。衰若し肯わざれば、道理什摩の処にか在る。衰若し擇び得ば、衰に這个の眼有るを許さん。衰若し擇び出さざれば、敢えて保す、衰は未だ眼を具せず。

・ 未用恠我云々　次に自分が云つことを、おかしいと思つことはないぞ、これこの通りだ。

・ 衰若拵得　どちらかに決択することができるなら。

問う、靈山會上百万の衆、唯だ迦葉のみ親しく聞くこと有り。如何なるか是れ迦葉親しく聞く底の事。師良久す。僧云く、和尚に問わざれば、顔んで空しく一生を過さんとす。師乃ち杖を將つて之を打つ。

問う、師子は象を捉つるにも亦た其の力を全つし、兔を捉つるにも其の力を全つす。既に是れ全力なるに、什摩と為てか善星を救い得ざ

る。云く、汝道え、救い得ざる、如今什摩の処にか在る。

・善星は生きながら地獄におちた。物語は涅槃経三十三などに見える。僧の問いはすねたような甘えたような問いである。すなわちなんとか和尚さんの全力で私を救ってください、というのである。救われずじまいだったと自分を描定しているお前はいまどこにいるか。胸に手をあてて考えて見ろ、というのが師の答えである。

師 耳の重きを患う。王太傳、書有りて疾を来問す。兼ねて偈有りて師に上る。世人悟道は耳よりするに非ず、耳患加つると雖も道亦た分つ。靈鷲の一機は迦葉會す、吾が師の傳得豈に聞くに聞わらんや。師 問を廻して云く、和を奉つるに及ばず、輒ち問詞を致原作置す。太傳若也もし未かならざれば、則ち截流の作を顯わせ。耳よりするに非ず、伝原作云得豈に聞くに聞わらんやと示すを蒙る。聞くよりして得ざりし者、請う後來の珍を露せ。太傳答う、好き晴れ、好き雨、花に宜し、麦に宜し、得不得は請う、大師親しく批せ。師云く、与摩ならば則ち大衆に望有り、北院何をか憂えん。此くの如しと雖然いへども猶お人の笑つを慮り恐る。

・患耳重 耳が聞こえにくくなった。

・王太傳 王延彬。

・露後來珍 後生のたからとしてお示しく下さいという意であろう。

・与摩則大衆有望 そういつことなら恥国の人民たちは希望がもてるというものです。

・北院 不詳

・猶慮恐人笑在 遠慮がちな批判。在は句末の強辞。

又因みに仰山と岑大蟲の話を挙し、師云く、前頭は彼此作家なるも、後頭は却って作家ならず。某甲、中に於いて一句語を下して云わん、邪法は扶け難し、と汝道え、什摩人の分上に向いて下語するやを。

又因みに仰山と景岑との話しを挙示して師が云う、前のほうは仰山と景岑の(どちらも作家であるが、後のほうはどちらも)作家ではない自分ならそこに一句の語を下して云おう、よこしまな法は、手直しのしようがない、とおまえさんは云ってみなさい、どついつ人としての分上に於いてこの語を下しているのかを。

・岑大蟲 長沙の景岑のこと。大蟲は虎をいう。仰山と景岑との問答は祖堂集卷十八に見える。師見景岑上座在中庭向日次 師從  
 辺過云、人人盡有這个事、只是道不得。云恰似請汝道。師云、作摩生道。岑上座便促胸与一踏。師倒、起来云、師叔用使直下是大  
 蟲相似」を指す。碧巖録第三十六則、傳燈録卷十にも見える。前頭 後頭がどの部分を指すのかは不明。前頭が両者の問答を指し、  
 後頭が、岑上座便促胸与一踏」以後を指すのかもしれない。

・邪法難扶 扶とは斜になって倒れようとするものにつつかえをすること。「邪法難扶」とはゆがんだ法はどつにも手なおしのしようがない」ということで手きびしい評である。長慶が仰山と景岑との問答全体に下した評として考えられるが、特に「前頭彼此作家 後頭却不作家」と言っているから後半では仰山、景岑とも否定し去られている感じである。

・汝道向什摩人分上下語 自分はこのように下語するが、どのような位置から、又どのような視点でこのように言ったのかを言うてみなさい、ということ。従つて「什摩人分上」とここでは下語した長慶自身の分上を指す。

問う、如何んが不疑不惑し去るを得ん。師便ち手を展べて両辺に向かい、却つて学人をして再問せしむ、我れ更に汝が与めに道わん。学人再問す。師乃ち露膊して坐す。学人礼拝す。師云く、汝且らく作摩生か会する。対えて云く、今日東風起れり。師云く、汝与摩に道うは、未だ人の見解を定めず、汝、古聖已来に於いて、什摩の言教時節の長慶に音しくし得るもの有るや。叢若し挙し得ば、叢に這个の話主有るを許さん。

質問する、どのようにしたら、不疑不惑になることができるのでしょうか。師はそこで両手を両方に広げて、また学人に再問させた、自分はおまえさんのために云おう。学人が再問する。師はそこで腕まくりしてすわった。学人がお辞儀する。師が云う、おまえさんはいったいどのようにわかったのか。学人が答えて云う、今日は東風が吹いています。師が云う、おまえさんがこのように云うのはまだ一個の人とし

ての見解とはきめられない。おまえさんは古聖以来を見て、どんな教えや時節因縁の、長慶のそれと比肩できるものがあると思つのか。おまえさんがもし示すことができたならば、この質問の提起者としての資格があると認めよう。

・露膊 脱膊と同じく腕まくりすること。

・東風起 春になったといつこと。立春。

・未定人見解 落ち着きの悪い言葉であるが、おまえはそう言つがまだ見解をびたりとあてていない。一個の人として、見解を確立できないといつ意味である。

・汝於古聖已来、有什摩言教時節齊得長慶 読みにくい文章であるが、一応まず不疑不惑と問題にする以前に、自分でこれだと思つようなつまり、これだとして不疑不惑し去るよつな言教時節で長慶のそれと匹敵しうるものがあるのかどうか示してみせよといつ意味にとる。言教は言句による教え。時節は時節因縁の時節。言句よりも広い意味で行動をも含む。

・話主 傳燈録卷十八に「許汝作話主」とあることから、問題の提起者を指す。

問つ、一不諦に於いて還た解く無過底の事を致原作置し得るや。師云く、汝既に我に問つ、我も亦た汝に問わん。与摩なれば則ち敢えて和尚某甲に問えと道わず。師云く、我れ也た汝が来処を委す。曩は亦た錯りて定半星を認むるを得ず。師前に代わりて但だ言く、珍重。

・不得錯認定半星 定半星は定盤星のこと。竿秤りの目盛り。私の重さを読み誤つてはいけないといつ意味。

孔子、諸の弟子に問つ、汝諸人は何を以て道と為すや。一人云く、無心を道と為す。一人云く、觸目を道と為す。一人有り、両手もて膝を撫し、雀躍して行く。孔子判じて云く、無心を道と為すは是れ向去道なり。觸目を道と為すは是れ明道なり。雀躍して行くは是れ現道なり。師は此の語を聞き、拈して衆に問つ、孔子与摩に判断するは、還た三人が意に稱い得たるや。人の対する無し。自ら云く、两个は則ち得たるも、一个は則ち得ず。

孔子が諸の弟子に尋ねた、おまえさんたちは何を道とするのか。一人が云う、無心を道とします。一人が云う、目にふれるものすべてを道とします。ある一人の人が手で膝を打ち、こおどりして行つた。孔子が判断して言う、無心を道とするのは道を(目ざして)行こうとする道だ。目にふれるものすべてを道とするのは、はつきりした直観の道だ。こおどりして行くのは、体現する道だ。師がこの語を聞いて、衆にさし示して質問する、孔子がどのように判断したのは、いったい三人の意になつていのであるか。答える人がいない。師が自ら云う、二人についてはよろしいが、一人についてはよろしくない。

・この孔子の話しの出処は不明、「論語」先進の「子路、會皙、冉有、公西華侍坐」の条を真似た構想であるうか。

・两个則得云々 二人は孔子の判断を受け入れるであろうが、一人はそうではない。その一人とは、無心を道とする」という答えに対して、「向去道」と判断したことを指すであろう。「向去道」ということは目的意識を持ち、方向づけられた道であるから、無心をそのように判断されることには、肯んずることができない。

師 清源に廻る。太傳問う、山中和尚、近日何の言教か有る。師云く、山中和尚、近日老婆心、人をして未だ開口せざる已前おに向いて會取む。太傳云く、与摩に道つは還た當るを得たるや。師云く、當不當は則ち且らく置く、太傳は作摩生か會得す。太傳云く、專甲も亦た商量する処有り。大師云く、太傳は作摩生か商量する。太傳乃ち足を收めて坐す。師云く、什摩人をして委せしむる。太傳云く、大師は委せず。師云く、上来何いずくにか在る。太傳云く、什摩の罪過かある。師云く、亦た須らく自から檢責せば好かるべし。

・委 知る、明らめる。

・上来何在 今までどこに居たか。

師 王大王の与めに、今古の成人立德底の事を説く。師、大王に向かつて云く、世俗中も亦た志人底の苗稼有り、佛法中も亦た志人底の苗稼有り。大王、師に就いて問う、作摩生か是れ世俗中の志人底の苗稼。師、挙して云く、青雲に路有りて應に須らく到るべし、金榜に名無くんば

誓つて帰らず。大王云く、作摩生か是れ佛法中の志人底の苗稼。師 拳して云く、努力して此生に須らく了却すべし、累劫をして諸殃を受けしむること莫れ。又た云く、無生を得ずんば終に止めず、徹を取るを期と為す。大王 礼拝して云く、若し和尚に遇わずんば、豈に与摩の次第を知らんや。

・莫交累劫受諸殃 交は教と音通。

僧に問う、本柄を傷けずして養は作摩生か道わん。对えて云く、某甲、口有りて只だ解く菜を喫するのみ。師云く、籍脊に汝に棒す、還た甘んずるや。云く、争でか甘んぜざるを得ん。師云く、養は過の什摩の処にか在りて、這個の棒を招得せる。对えて云く、若し専甲を打たずんば、何処にか長慶有らん。師云く、是なり。長慶の意作摩生。其の僧珍重す。

・本柄 中心になつて核。汝をして汝たらしめているもの。本来人、主人公。

・是也 なるほど。

師 有る時云く、我れ若し汝の過を放さば、縦い汝の百般に東道西道して、口、懸河に似たるも則ち得たり。我れ若し汝の過を放さずんば、汝は今の什摩をか道わんと擬する。对えて云く、乞う和尚、某甲の過を放せ。亦た道処有らん。師云く、我れ汝の過を放す、作摩生か道わん。对えて云く、来日、供養主の齋を設く。師云く、我れ若し養の過を放さば汝は与摩に道つ。我れ若し養の過を放さざれば、汝与摩に道いて、過は什摩の処にか在る。無对。別人对えて云く、若し与摩に道わざれば、争でか和尚を識得せん。師便ち之を許(原作訝)す。又た別僧に問う、過の過を放す、作摩生か道わん。对えて云く、只だ這個。

僧の到り参ずる次で、師便ち把住して云く、兄弟を屈著すること莫きや。对う、屈せず。師 僧を推し出して云く、如許多の時、虚しく草鞋を踏破して什摩をか作す。

又た一日僧參ず。師、促蹠把住して云く、相い觸忤することを成すこと莫きや。僧無對。師、便ち托出す。有る僧、安国に拳似す。安国云く、招慶今日、殺人の刀有り、亦た活人の劔有り。僧、保福に拳似す。福云く、招慶殺活俱に備わる。中招慶云く、与摩ならば則ち首者に過無し。演侍者云く、頼に和尚与摩に道うを得たり。師進んで云く、是なり。与摩に云わざる時作摩生。侍者無對。師代わつて云く、和尚若し与摩に道わざれば百雜碎。

・ 觸忤 踏みつける。

・ 首者 一ここでは長慶をいうのであろう。

・ 頼得和尚与摩道 ありがたや、長慶和尚がああ言ってくれた。

・ 百雜碎 一こつぱみじん。

問う、学人近ごろ樓林に入る。乞つ師、宗乘を拳唱せよ。師云く、是れ拳揚か、是れ不拳揚か。学人礼拝す。師云く、會するや。学云く、不會。師云く、頼さいわいに汝不會。汝若し會せば、何処にか更に招慶有らん。

問う、塞鴈、蘆を銜んで質と為す。祖代何に憑つてか信と為す。師云く、筋悍する莫れ。与摩ならば則ち金口は談揚を絶し去らん。師云く、還た此の消息を得るや。学曰く、師還た説くや。師云く、且らく汝に問わんと要す。僧曰く、与摩ならば敢えて和尚を誑妄し去らざるなり。師云く、還た誑妄せざるを得るや。僧曰く、和尚諾せば即ち得ん。師云く、識弁して相い訪わば好し。

・ 莫劭悍 失礼なことを言つものではない。

問う、古人道う、目撃道存して、言説に在らず。和尚の此間すかんに還た這个おの人を著くや。師云く、是れ我が這裏は別に来由有り。僧曰く、和尚

如何ん。師一搥を与えて云く、一脚を過与するも、解く拈出せず。

・古人 莊子田子方篇。

・是我這裏 ほかでもないわしのここには別の流儀がある。

・拈げんじつ。

・一脚 具体的なものではなく、抽象的なものであるじつ。

問う、古を知り今を知るは時人共に委す。如何なるか是れ招慶截流の作。師云く、衰が所問に酬いんか、衰が所問に酬いざらんか。僧云く、深く和尚が道処を委す。師云く、是れ衰、招慶が什摩の処に落在するを委得せるや。僧云く、躰悉すれば則ち可ならず。師云く、躰悉すること作摩生。学人礼拝す。師云く、都頭有りと雖も且く副將無し。

・躰悉 びたりとつかむ。

師有る時云く、靈利参学底の人、更に這裏に到り来らず。僧問う、既に這裏に到り来らず。和尚争でか他の靈利なるを委するを得たる。師云く、只だ他の這裏に到り来らざるを見れば他の靈利なるを委す。僧云く、什摩の処にか支荷せん。師云く、汝を見るに是れ這个の脚手にあ  
らひ。

・支荷 己の事とする。

・脚手 下ばたらき、召し使い。

問う、承るらく、和尚に言える有り、一等に是れ学ばば、直に見処をして天下人の舌頭を坐却せしめよ、と如何なるか是れ天下人の舌頭を坐却する底の見。師云く、多少の年、此に在りて住持するも、未だ曾つてこの須索を領せずんばあらず。僧云く、三寸を仮らずして、還た学

人に通信することを許すや。師云く、汝に許すに作摩生か通信せん。僧云く、今日東風起れり。師云く、涅槃堂裏の漢。

・ 一等は字 同じ学道修行するなら。

・ 直交 交は教と音通。

・ 須索 ワイロを請求する、役得の催促。

・ 涅槃堂裏漢 死人同然のやつ。

師出世すること十八年にして、衆千五百人にのぼる。長興三年壬辰の歳五月十七日を以て遷化す。春秋七十九、僧夏六十なり。師は超覺大師と号す。淨修禪師讚すらく、緇黄深く鄭重なるも、格峻にして実に当たり難し。機を盡して相見する、立下に僧堂を閉す。

## 祖堂集卷第十